家庭・保育所・幼稚園

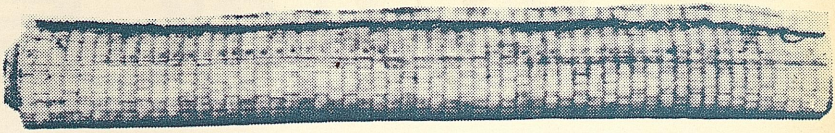
幼児の教育

第六十五巻 第八号 日本幼稚園協会

8

お茶の水女子大学 昭和41.7.5 教育図書

敷きもののはなし



敷きものには、日本のむしろ・ござ・たたみなどのような、すわりごこちを快適にするためのものと、ヨーロッパのじゅうたん・マットのように、室内を美化することと、足ざわりを柔らかくするためのものとがあります。

なかでも〈ござ〉は、古く《枕草子》に「御座という畳のさまにて高麗など、いと清らなり」とあり、日本人の生活に密接に結びついています。

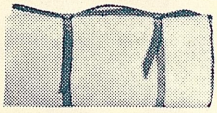
子どもたちにとっても、〈ござ〉を、庭に敷いて、ままごと遊びや、ごっこ遊びをしたり、昼寝をしたり、また〈ござ〉をもって、野原に遊びに行ったり、おおいに親しまれてきました。

いまここに、古くから日本の子どもに親しまれてきた〈ござ〉の役目も、感触がよく、美しいじゅうたんの役目をも一緒にもち、しかも子どもの運動具としても利用できるマットがあったら、どんなにすばらしいでしょう。

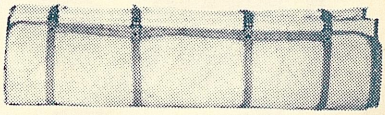
さっそく二学期から使ってみたい、という気持になりませんか。

キンダーロールマット

(A)



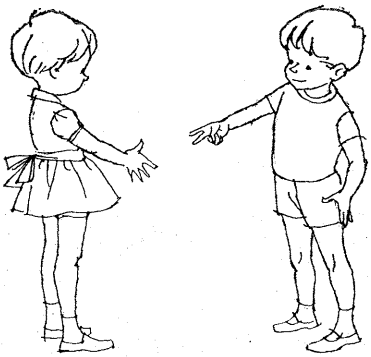
(B)



■表面はビニール加工ですが、表には感触の柔らかい材質、裏には丈夫な材質を配慮してあります。中味はウレタンなので、適度な弾力性があり、小さくたためて、軽いことなど持ち運びに便利です。

(A)　定価　2500円（長さ180cm・幅90cm・厚さ0.5cm）
(B)　定価　4700円（長さ360cm・幅90cm・厚さ0.5cm）

発売 フレーベル館



幼児の教育　目次

——第六十五巻　八月号——

表紙　堀内誠一

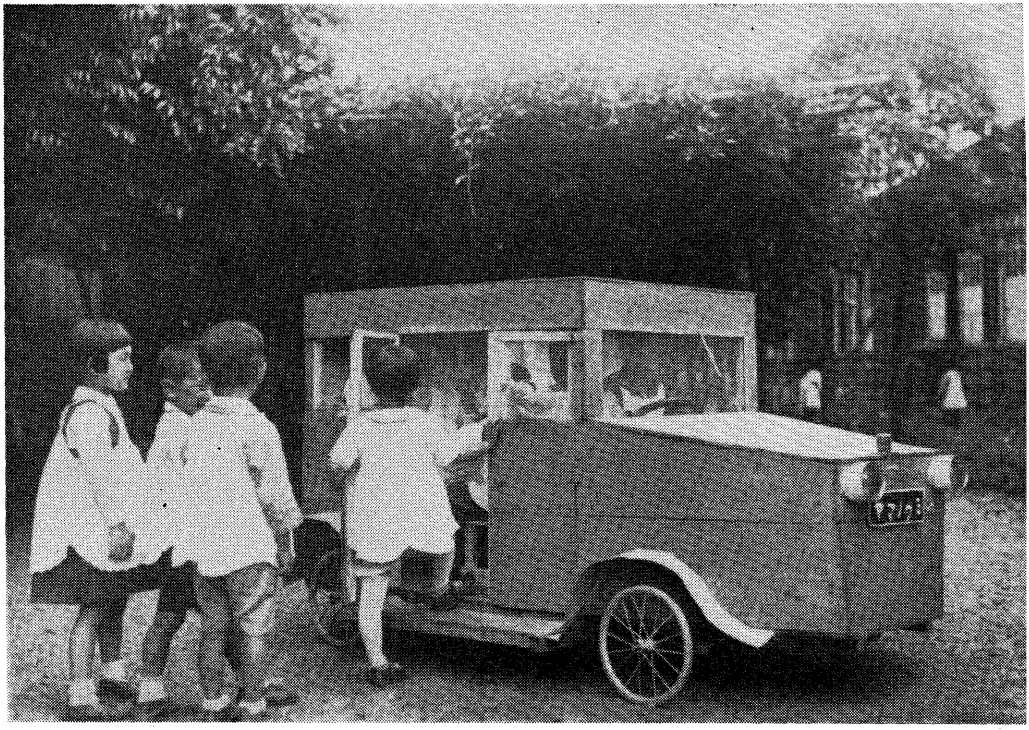
幼稚園設立九十周年記念の年にあたって……山下俊郎…(3)
昭和はじめの附属幼稚園と幼児教育界……堀　七藏…(8)
幼児のための紙芝居の今昔……上沢謙二…(16)
東京の幼稚園今昔……山村きよ…(20)

☆座談会　司会　津守　真
誘導保育の成立のころ……及川ふみ・新庄よしこ
菊池フジノ・徳久　孝…(24)

☆昭和初期の誘導保育
旅へ……新庄よしこ…(35)
わたくし達の自動車……徳久　孝…(42)

☆幼稚園創立90周年の年にあたって
昔の幼稚園の想い出……和田トヨ…(44)
倉田ミチ…(48)
笠井久子…(51)
高森　豊…(54)
草野京子…(56)
林　叔子…(58)
大塚喜一…(62)

リズムあそび☆夏のあそびを中心として……森山美代子…(65)



わたくし達の自動車（昭和７年・お茶の水女子大学附属幼稚園にて）〈本文42～43頁参照〉

幼稚園設立九十周年記念の年にあたって

山下俊郎

わが国で最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（いまのお茶の水女子大学附属幼稚園の前身）が、はじめて「幼稚園」という名称で開かれたのが、明治九年すなわち一八七六年であるから、今年はちょうど幼稚園設立九十周年の年にあたっている。この秋には、この九十周年の記念の行事がいろいろとにぎやかにくりひろげられる予定になっている。九十年というと、ずいぶん長い年月である。いままでのことをふり返りながら、少しばかり考えてみたいと思う。

一

東京女子師範学校附属幼稚園が開かれるまでに、横浜のキリスト教婦人宣教師による幼稚園や京都の柳池小学校附設の幼稚遊嬉場といった、永続しなかった施設や、明治五年の学制における幼稚小学のような構想にとどまるものはあったのであるが、政府による教育制度の全体的体系整備の一環として、はじめて実現した公立の幼稚園である点において、この附属幼稚園の持つ意義はきわめて大きいものがある。この幼稚園の設置に端を発して、次第に幼稚園が普及する道をとったからである。

しかしながら、この日本における最初の幼稚園は、当時の上流階級の専有物であったようで、社会一般との結びつきがきわめて薄かったといわれる。けれども、その後明治十一年にいたって、鹿児島と大阪にそれぞれ一園ずつ設置され、また文部省示諭によって幼稚園が一般市民のものであることを一般に周知の方法をとったことと相まって次第に普及の道をとったといわれる。こと

に、明治十七年には学令未満児は小学校に入れてはならないという通牒が出されたという。(このことにふれると、わたくしはずっと以前に父に聞いたことを思い出す。わたくしの父はすでに故人であるが、明治十年の生まれであって、五歳のころから小学校に行って、受持ちの先生をいろいろと手こずらせたという話をよく聞かされたものである。鹿児島県での話であるが、ちょうど明治十五、六年ごろのことになる。このようなことが全国各地にあったので、このような通牒が出されたものであろうと、わたくしは推測したりしている。)

このころには、東京女子師範学校附属幼稚園がモデルとなり、全国の幼稚園が次第に設立されるという形をとったものであって、明治三十年頃までにはわが国の半数以上の道府県に幼稚園が設置され、総数二二二に及んでいる。

そして、明治三十二年に、文部省令によって、幼稚園保育及び設備規定が定められ、翌明治三十三年にはこれが小学校令の中に包摂されたが、ここにはじめて幼稚園というものが法的にも整備された形になったといえるであろう。この規定の基本的な精神は、ある意味においては、のちの幼稚園令に通じて、現在の学校教育法の制定の時まで生きているといってもいいであろう。

このちわが国の幼稚園は、次第に普及増加の道をたどったのであるが、とくに大正年代に入って増加し、大正五年には六六五となっている。そして、大正十五年はじめて幼稚園令が制定公布されるという画期的な年であったが、この年には幼稚園の総数は一、〇〇〇を越えて、一、〇五六となっている。このことは、教育思潮の上からいっても、大正中期は自由教育思潮の起ってきた年代であることと思いあわせても、意味のあることであると考えられるものである。

幼稚園令公布後、幼稚園は漸増の道をたどり、量的に増大すると共に、幼児教育の内容も飛躍的に進んだといえる。昭和十五年には幼稚園数は二、三一二という数になっているのである。そして、幼稚園という名の示すとおりの幼児の楽園ではあったが、第二次世界大戦という具体的な形になるまでの日本という国の底に流れていた底流は、必ずしも幼稚園に対して暖かいものではなかった。そして、太平洋戦争という現実の中にあって、幼稚園は形式的にも実質的にも圧迫され、減少した。終戦の翌年昭和二十一年には、総数一、三〇七となってしまったのである。

太平洋戦争終戦後の昭和二十二年に学校教育法が制定され、その中に幼稚園が学校教育体系の中に確固たる位置を占めるようになった。そして、学校教育法施行後五年の昭和二十七年には、園数二、八三五となり、その後年を重ねる毎に増大し、昭和三十七

年には七、三七二となり、昭和四十年には八、五五一となっている。そして、昭和三十八年以来文部省によって進められている幼稚園振興七年計画の進行によって、昭和四十年には小学校新入学児童のうち幼稚園を経た児童は四〇％強に及ぶことになったのである。

このように、表面的な数字や法的な変遷をたどってみると、わが国の幼稚園は、九十年の間に飛躍的な進歩をとげているといってもいいであろう。しかし、内容的な問題についていろいろ考えてみると、この九十周年の記念すべき時にあたって、わたくしたちがわが国の幼児の上により大きい幸せをもたらす上に考えなければならない問題が、まだたくさん残されていると思うのである。

二

まず、数的な問題から考えてみよう。

数的な問題として第一に取りあげられなければならないのは、幼稚園の普及の問題である。小学校一年生の新入学児童のうち、幼稚園の保育を受けた者の率、すなわち就園率は、幼稚園令公布までではほぼ三％程度であったというが、公布直後の昭和二年には四％となり、十年後の昭和十一年には六％となり、次第に増大したが、昭和三十八年文部省の幼稚園振興七年計画の発表当時にはほぼ三三％になっていた。この計画では七年の間に就園率を六〇％にまであげようという目標をたてて、幼稚園の拡充普及を計ったのであるが、さきにもふれたように昭和四十年にすでに四〇％強になっている。恐らく七年計画は実現されるであろう。ただ問題は、六〇％は一応の目安ではあるが、これをもっと増大させたいということである。

このことには、幼児教育の義務制の問題がからんで来て、そう簡単には答が出て来ないといえるのであるが、義務制はやや先の問題として、現状からいうならば、七〇％ないし七五％にはあげたい。それは、保育所で保育を要する幼児が全幼児のほぼ一九％ぐらいと推定されるからである。そうすると、ほぼ全体の幼児の上に保育の思想が及び得ることになるので、七年計画をさらに上まわることが望まれるわけである。

幼稚園の拡充普及に関連して問題となることは、公立幼稚園と私立幼稚園の問題である。わが国の幼稚園はさきにもふれたように国立の東京女子師範附属幼稚園から出発し、明治初年は公立がなかった。しかし、その後、次第に私立幼稚園が多くなり、わが国の幼稚園は数的には私立幼稚園が圧倒的地位を占め、現在、私立と国公立の比は六対四の比になっている。そして、さきにふれ

た七年計画では主として公立の推進が意味され、現実にもその動きが強いのであるが、そこに問題点がある。私立の既設園との配置の問題、小学校の空教室の安易な転用による幼稚園設置基準の無視、などは、けっして見逃すことのできない問題である。とくに、幼稚園の普及という裏面に、施設および保育内容の質的低下ということが伴うとすれば、それは許すべからざる問題である。幼稚園の拡充普及ということは、つねに幼児の上により高い内容をもたらす保育を伴うものでなければならない。悪質のものの普及はつねに戒められなければならないものである。

なおこのことと関連して、幼稚園教育の義務制という問題がある。わたくしたちは、すべての幼児の上に差別なく、あまねく幼児保育の思想を行きわたらせるという意味において、義務制が望ましいと思うものであるが、現実の問題としては多くの検討さるべき問題が残されている。幼稚園と保育所との問題を検討し、その保育内容の一元化を考えるとき、窮局の到達点が義務制となるので、昭和三十八年十月の文部省初中教育局長と厚生省児童局長の共同通知にこのことが暗示されているので、多くの論議を引き起している。しかし、この問題は、大正十年ごろからすでに論議されてきたことであって、わたくしはこの共同通知が一つの画期的なものであることを認めざるを得ないと思う。この方向への推進が検討さるべき時に来ていると考えるものである。

三

幼稚園の保育内容について、少し考えてみよう。

幼稚園設立当初の頃からしばらくの間は、恩物中心の、フレーベル正統派といっても、わたくしたちの考えからいうならば形式主義的な末梢的なフレーベル流の保育法が行なわれていたようである。のちに明治三十二年の文部省令で、保育項目が制定されているのを見ると、唱歌、遊嬉、談話、手技といったものが挙げられており、のちの幼稚園令に観察が加えられただけで、学校教育法制定にいたるまで一貫しているようである。そして、どことなくフレーベル正統派の恩物中心主義の残りかすのようなものがただよっていたという感じがすることは否めない。

このような末梢的フレーベル流の保育に対して、アメリカでは進歩主義教育者たちの新しい児童心理学の研究法案による痛烈な批判が行なわれていたのであるが、わが国でも大正年代に入り、倉橋惣三による新しい保育の理念と内容の展開が、いちじるしい勢いで行なわれた。恩物からの解放、会集の廃止といった思い切った主張によって、幼児の自発性の尊重を基調とする正しい保育が主張されたのである。これは、さきにもふれたように一方にあ

った大正期の自由教育思潮と相まって、新しい展開を見たものであると考えられる。

幼稚園令は大正十五年に発行されたのであるが、その実際の保育内容の展開にあたっては倉橋惣三の指導力が大いにはたらいていたのである。そして、昭和年代に入って時の進むにつれて、次第に強くなってきた全体主義的、国家主義的な動きは、幼稚園保育の世界にも、その力を強く及ぼそうとした。とくに太平洋戦争下にあっては、幼稚園不要論をとなえる者もあり、幼児を花園で遊ばせるなどという考え方は戦時体制下許すべからざるものであるという時局便乗者も多かった。このような中にあって、倉橋をはじめとして幼児保育の世界を守った人々の努力は涙ぐましいものがあった。このことはわが国の幼稚園の歴史の上に特筆さるべきことであると思うものである。

太平洋戦争によって壊滅にひんした幼稚園は、昭和二十二年学校教育法の制定によって新しいいぶきを回復した。そして、さきに述べたように、次第に進展の道をたどって今日に至ったのである。その中にあって、保育内容に関しては昭和二十三年に保育要領が編まれ、倉橋惣三はその編纂委員長として心をかたむけてこの作製を推進したのである。そしてその内容はまさに、その三十年前から倉橋が主張していた保育法の精神の具現であったといえる。この保育要領は、のちに幼稚園教育要領として昭和三十一年および昭和三十九年に改訂されたのであるが、新しい道を示すものとして現在行なわれているわけである。わたくしたちは、これが正しい意味において生かされることを、幼児の幸せのために願うものである。

四

人間における発達現象を研究している発達心理学者によると、発達というものは、らせん状をなして上昇する過程であるという。らせん状にグルグルまわりながら、同じところを何回となくくり返して通るのであるが、全然同じところではなくて、らせんの一段上の所を通っている、そこに発達があるのだというのである。

わたくしは、わが国の幼児保育界の歴史的な過程をふり返ってみるときに、いつも同じところをまわっているような気がしてたまらない。倉橋惣三も「三十年前にわたしがいっていたことが今やっと問題になってきた」とわたくしに語ったことがある。九十年の幼稚園の歩みがそうなるのかも知れない。しかし、それはらせんの一段上の所へと進みつつあることをわたくしたちは心からこい願うものである。

昭和はじめの附属幼稚園と幼児教育界

堀　七　藏

一

私は大正十三年十二月二十一日、東京女子高等師範学校附属幼稚園主事を命ぜられた。それは、附属小学校主事北沢種一が二ヵ年間の在外研究員として、英吉利、独逸などの留学を終えて、大正十三年十二月帰朝したので、私の附属小学校主事代理がお役ご免となった。そして、一方附属高等女学校主事藤井利誉が大正十三年五月、女高師教授を辞職して東京市教育局に転出し、倉橋惣三附属幼稚園主事が、そのままで附属高女主事になっていたので、大正十三年十二月、倉橋教授は附属高女主事のみとなり、私が幼稚園主事となった。それで、茨木校長の下に、倉橋高女主事、北沢小学校主事、堀幼稚園主事となったわけである。当時、理科出身の私が幼稚園主事となったことを異様に感じた者は、女高師内外に少なくなかったようであり、私自身としても大いに覚悟するところがあった。

二

私が主事となったときには、附属幼稚園は仮園舎で、第一部（同年齢の幼児のみを以て組を編成）も、第二部（年齢の異なる幼児を相混じて組を編成）も、同一の建物であった。すなわち、大正十二年九月一日の大震火災で、第一部の園舎も、第二部の園舎も悉く焼失し、幼稚園の備品一切を焼失しているのみでなく、幼稚園の歴史を語るものは、悉く焼失している。幸にして、小西信八（明治十三年九月より明治二十三年四月まで幼稚園監事）先生が聾唖学校長で健在であったから、たびたび訪問して、幼稚園の歴史を語る諸種の資料を寄附して貰うことが

できた。また、幼稚園開設当時の保姆、豊田芙雄女史が水戸に健在であり、また、明治十一年、大阪府の命により東京女子師範学校附属幼稚園へ保姆見習として留学した氏原鋹女史が、その令妹膳真規子女史（大阪保育界に四十年間尽力せし人）と共に、熱海に閑居せられ、また、明治十八年七月東京女子師範学校小学師範科を卒業して、多年附属幼稚園保姆として勤務せられた下田たづ女史、明治二十年三月小学師範科を卒業して、神戸の保育界を牛耳っている望月くに女史、明治二十七年三月、高等師範科を卒業し、多年附属幼稚園保姆として勤務せられた雨森釧女史、明治四十一年三月、高等師範学校理科卒で幼稚園保姆を多年勤められていた野間トヨ女史などから、いろいろ参考となる助言を受けた。更に、倉橋前主事は勿論、明治四十五年三月、東京女高師理科卒業の坂内ミツ、大正五年三月東京女高師技芸科第二部卒業の及川ふみ、大正六年三月文科第一部卒業の新庄よしこなどが、現在幼稚園保姆として勤務中であるから、是等、幼稚園保育の諸先輩とよく相談して、幼稚園主事として職務の遂行に当った。

三

まず、明治三十八年より東京女高師に開設せられていた保育実習科の主任となって、大正十四年三月、山村きよ、徳久孝、岸辺静子、国木田みどり、床次夏など、十数名の保育実習科生を卒業させ、入学者の定員増加をはかり、全国幼稚園数の増加に伴って優良なる保姆の養成供給に努めた。

また、明治二十九年四月二十一日（フレーベルの第百十四回の誕生日）発会式を挙行したフレーベル会が、大正七年十月の総会において、日本幼稚園協会となり、その機関雑誌「婦人と子ども」は、「幼児の教育」と改題して、毎月発行せられていたが、大正十二年九月一日の大震火災のため、ほとんど開店休業の状態となっていた。

私は幼稚園主事に就任すると共に、日本幼稚園協会主幹となり、その会の活動を開始し、「幼児の教育」の発行に努力した。まず、日本幼稚園協会員の名簿の整理をなし、「幼児の教育」の編集、印刷発行等、諸般の事務を附属幼稚園において、保姆諸君の協力の下に実行した。

かくて、大正十四年十一月二十九日、東京女高師開校五十年記念式典が挙行せられ、皇后陛下、行啓あらせられ、令旨を賜った。そして校長の御先導で、各陳列室を御巡覧あらせられた。いずれの室においても、興味深くみそなわせられたが、わけて、幼稚園陳列室においては、御在園当時（明治二十二年頃）の幼児の写真、成績品などに昔をしのばせられたように拝察された。

四

大正十五年四月二十一日、時恰もフレーベルの誕生日という記念すべき日に、勅令第七十四号を以って幼稚園令、文部省令第十七号を以って幼稚園令施行規則が公布せられた。この以前にも、文部省令あるいは文部省達そして、たびたびの発令があって、中でも主なのは、明治三十三年八月小学校令の中に、幼稚園に関する規程を定められたが、いずれも、幼稚園法令として独立したものではなかった。それで、幼稚園関係者の待望久しき、独立した幼稚園令及び幼稚園令施行規則が公布せられたのである。そして、従来、保育課程として、「遊嬉、唱歌、談話、手技」の四項目が定められていたが、幼稚園令施行規則第二条で、「幼稚園ノ保育項目ハ、遊戯、唱歌、観察、談話、手技等トス」と、五項目が定められた。ここに新しく観察が加わったことは、われわれが林博太郎伯爵の主催せる理科教育研究会で、多年要望せる一端が実現せられたものであった。それで、私は林伯爵の推挙により自費で、文部省在外研究員として、附属幼稚園主事現職のまま、大正十五年四月二十六日、欧米留学の途にのぼった。

そして、私は理科教育の研究を目標として欧米の教育を視察すると共に、幼稚園教育も出来るだけ多く、またよく研究する為、イギリスを始め、ベルギー、オランダ、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、オーストリア、チェコスロヴァキア、イタリア、スイス、フランス、アメリカなどの視察を終えて、昭和二年四月十四日、約一か年ぶりで無事帰朝した。

五

私の留守中、倉橋附属高女主事は、辞令なしで、幼稚園主事の代理をしておられ、茨木校長排斥の騒動に巻き込まれ、一方ならぬ苦労をせられた。それで、昭和二年三月、倉橋高女主事は、茨木校長と交替で東京女高師校長になられた吉岡郷甫氏に対し、附属高等女学校主事の辞表を提出して、単に教育学担当教授となられた。したがって、私が幼稚園主事として活動するとき、大小となく、倉橋教授に相談したので、恰も二人の幼稚園主事がある形となった。すなわち、文科出身のベテラン前主事と理科出身の新米主事とが提携協力して、幼稚園令による附属幼稚園の経営に当り、且つ、昭和はじめの幼児教育界を指導するわけである。

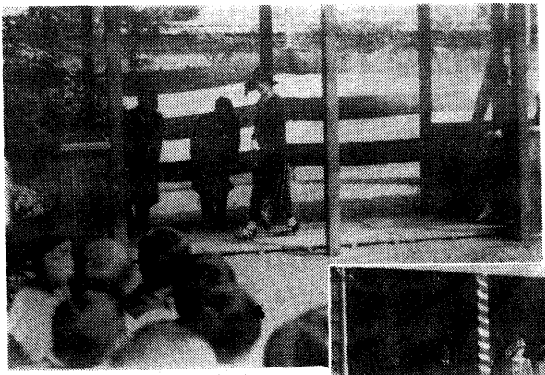
六

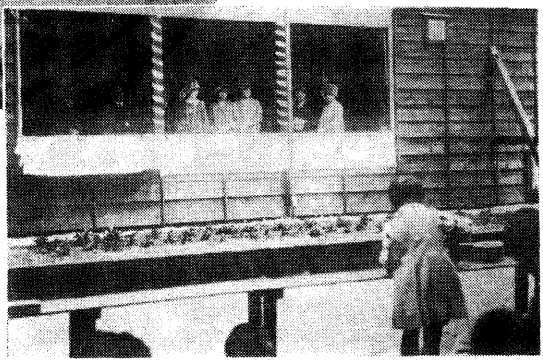
附属幼稚園はバラック園舎であり、従来の保育用具は皆無となったから、一切を新に施設し、保育の実際を一新した。是等

は昭和五年三月、「**楽しき幼稚園生活**」によって回想したい。

昭和五年三月二十七日麗かな春の日

皇后陛下には東京女子高等師範学校に行啓あらせられたのであります。この日





陛下には東京女子高等師範学校生徒児童の講堂演習を台覧あらせられて後、玉歩を附属幼稚園に運ばせられ、幼児達の楽しい幼稚園生活の有様を一々長時間にわたって御巡覧遊ばされましたことは誠に無上の光栄であります。更に「幼児の生活」の写真アルバム等を奉献いたしましたことは光栄の上の光栄であります。それで、この「幼児の生活」の写真に有難き行啓を御迎へ申上げた写真を加へ楽しき幼稚園生活として出来上ったのがこのアルバムです。このささやかなアルバムでも光栄ある楽しき幼稚園生活を永遠に記念することとなりましょう。

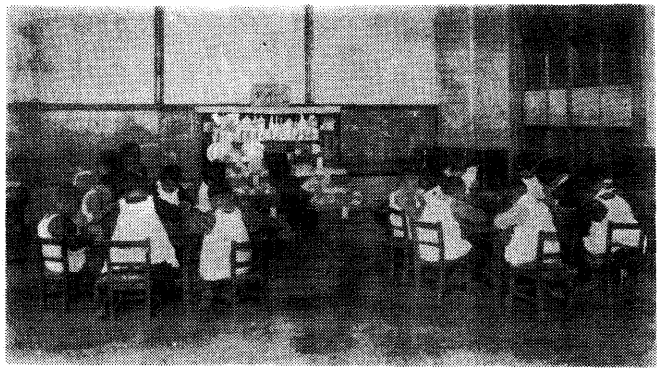
幼児の生活

（写真解説）

幼児の生活は、自発の活動と、多面の興味とに生きています。その生活を純真のままに発揮せしめ、片寄りなく充実せしめるのが、幼稚園の一日です。

一、八百屋遊び　新

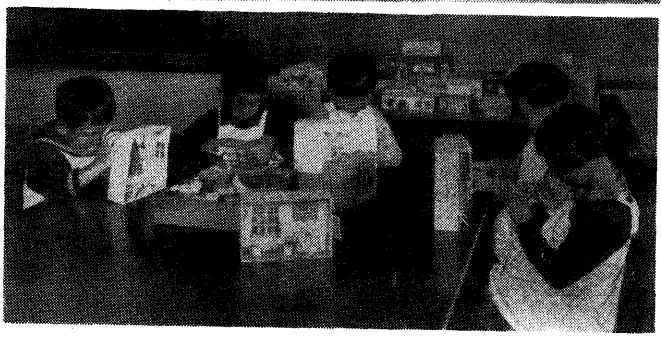
写真1



写真下へ　2. 3. 4. 5

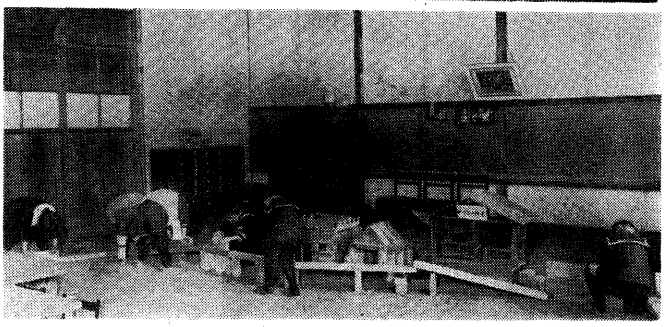
保育法中の所謂「目的保育」の一こまであります。

二、粘土製作　いかにも無造作に製作し、如何にも無造作に自己の表現力を楽しんでいる小さな原始芸術家の、そのこんこんとして尽きない製作的喜悦の無限には、全く驚嘆の外ありません。

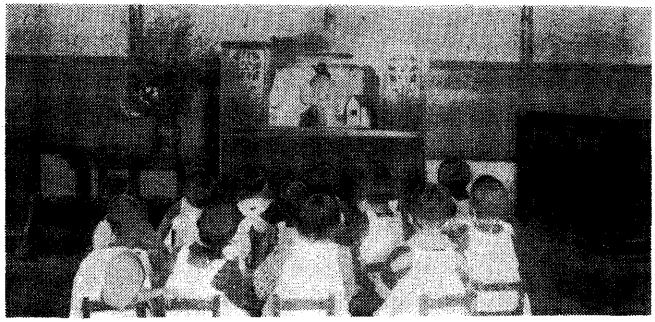


三、箱の家　平常の観察と結びつけて、おのずから多分の社会興味を含ませることの出来る、新しい製作遊戯です。

四、砂箱　大人の箱庭、老人の盆景と全然ちがって、現代のお茶の水の幼児が作った砂箱には壮大美と現実美との美事な総合があります。



写真下へ　6.　7.　8.　9



五、床上積木　蜜柑箱を改造したオチャノミヅ駅には、切符売場と改札口が忘れずにつけてあります。今、それを起点として、萬世橋方面と水道橋方面とへ、積木の電車線路が起工し始められました。

六、人形芝居　今し、舞台は猿と蟹との対話の最中。

七、相撲　小さい行司の可愛らしい目の光るところ、一切を支配するものはフェアープレーの法則ばかり。

八、大積木　大人は努力の結果を楽しみ、子どもは努力そのものを楽しむ。

九、かごめ　のどかな歌の声と、小砂利を踏む軽い靴の音

写真下へ　10.　11.　12

が、いつまでもいつまでも続きます。

一〇、おままごと　丁寧なお嬢様とお行儀のいいお客様、うっとりと想像の中に遊ぶ幼児達の世界は、いつでも明るく笑っています。

一一、丸鬼　溢れ漲る元気に方向を与え、法則を設けて、その活動満足が一倍深められさえすればいいのです。

一二、枠登り　自ら攀じて高きに登ることの愉快は、今日の都会の子どもに封鎖せられた愉快であります。それを補う為に工夫せられたのが、この新しい遊具、「枠登り」（ジャングルジム）であります。（昭和二年五月堀七藏考案、フレー

ベル館製作）

七

幼稚園令が公布せられた大正十五年には、幼稚園数は官公私立合せて一、〇六四、昭和二年には、一、一八二、昭和三年には、一、二九一と、年々非常な増加の態勢にあった。しかも、保育項目に、新に加わった「観察」の指導に悩むものが少なくなかった。そこで、私は、保育実習科における「自然の観察」を担当し、大岩金助教授に園芸実習を、また、「手技」指導の実力養成のため、手工を山形寛教諭、図画を及川教諭に、更に、遊戯は新帰朝の三浦ヒロ助教授に担当させた。また、「幼児の教育」誌上は勿論、日本幼稚園協会主催の夏季講習会等に於て、欧米諸国における幼稚園教育の実際を紹介し、保育項目の観察指導について講演した。とくに、昭和二年以来、日本幼稚園協会主催夏季講習会には、東京府立第六高女教諭戸倉ハル氏を起用して、幼稚園遊戯に新風導入を図った。また、附属幼稚園の本建築の設計立案し、文部省建築課の採用するところとなった。かくて、昭和五年十一月十五日、吉岡校長より、「君は理科出身の幼稚園主事として十分勤めたから、今度は附属小学校主事となれ」との命令を受けた。そして、倉橋惣三氏は再び幼稚園主事に就任せられたのである。

昭和5年4月　附属幼稚園55年記念

上段左より　白根美智子・神原キク・及川ふみ・倉橋惣三・土川五郎・堀　七蔵・菊池フジノ・徳久　孝・新庄よしこ

下段左より　相賀ヨシ・下田多津・氏原　鋹・豊田芙雄・大久保介寿・膳真規子・雨森　釧

幼児のための紙芝居の今昔

上沢謙二

◇からくりから立絵へ

紙芝居の起りは、古く徳川末期に発しているとされる。享保年間（一七〇〇年代）にはじまった「のぞきからくり」や、享和年間（一八〇〇年代）にあらわれた「うつし絵」に影響されて、明治の早い頃に生まれた。のぞきからくりは、小さな舞台にからくり人形が出て所作するのをのぞいてみるもの、うつし絵は、ガラスに描いた画に、光線を当ててうつしだすもので、いずれも街頭で行なわれた。

それにヒントを得て「立絵」といわれるものがつくられた。それは人間の姿を両面から描いて貼りあわせ、中へ、串のような細い竹を入れて、演者はそれをもって、舞台のかげからうごかす。舞台は、縦一フィート半、横一ヤードくらいの大きさで、それを車に乗せてひいてあるく。そうして町の道ばたへとめると、集まってくる子どもたちに、まず、飴を売る。そうして幕をあける。子どもたちは飴をなめながら立って、折重なって見物する。のぞきからくりも飴を売ったので、それをまねたのである。

紙人形は両方から出てきて（演者は両手でもっている）チャンバラなどをやりだす。そうして一方がばっさり斬られると、途端に、ぐるりとまわして、裏を出す。そうすると、血だらけになった姿があらわれるという仕組である。これが「紙芝居」といわれた。

毎日、おなじところへ大体きまった時間にくるので、子どもたちは待ちかまえている。それでなじみになって、あちこちまわるので一定の商売として成り立つようになった。

東京では、方々に見られるようになり、子どもばかりでなく、大人も足をとめるようになって、いつの間にか、街頭の人気者になった。

これに目をつけて、画かきを雇って紙人形をつくり、売子を募集して、それに貸して料金を取るいわゆる貸元ができて、組織的な商売になった。

昭和五年頃、東京における貸元は三十軒近くなったといわれる。

◇立絵から紙製の人形へ

需要がひろまるにつれて、紙人形は製作に手数がかかるので、それに応じきれないようになったし、製作費も嵩んで値段も高くなるので、手数も材料ももっと簡単にできる平面的な絵にして、それを何枚か組合わせて、順々に抜きさしして進行するやりかたに変えるようになった。こうすれば、一人一人の別別な人形をつくることはいらないし、前景背景のような舞台装置も省けるようになったのである。

それで急速にひろまったので、児童の教育また社会の風教上から注意されるようになり、業者の側も反省して、昭和七年、東京において、日本画劇教育協会が組織されたが、参加者は千五百名に達したといわれる。

かくて次第に全国的にひろがったが、昭和八年には、キリスト教の立場から、今井よねによって、東京に「紙芝居伝道図」が生まれ、大阪日曜世界社から、西阪保治によって同じ趣意の紙芝居が製作発行された。次で東京の全甲社から、昭和十年に「幼児紙芝居」が、十一年に「仏教紙芝居」が出版された。

なお、十年には、松永健哉による「日本教育紙芝居連盟」が誕生し、発展して「日本教育紙芝居協会」となり、会員三千人を擁するまでになったが、更に教材として学校にも取上げられ、児童たち自身による製作も奨励されて、後には、小学一年の教科書「エノホン」に、紙芝居の製作方法が載せられるようになった。

かくて教育界にとどまらず、社会的にも利用されるようになり、商店や会社の宣伝にも取上げられ、更に防諜防犯や、選挙粛正というような公け的な運動にも使用されるようになったのである。

ここで、高橋五山を逸することはできない。彼は早くより「教育紙芝居」を提唱し、その製作出版に努力すると共に、或は学者の意見に聴き、実際関係者の声に徴し、専門的な委員会を組織して、この方面の発達を促進した。彼は飽くまでも教育紙芝居と街頭の商業紙芝居を区別し、単に子どもをよろこばせる娯楽を目的とすることを排すると共に、窮屈な型を押しつけ

る形式的なものに堕することを戒しめ、深い教養性と高い教化性を兼ね備えるものでなければならないことを主張し、これを貫ぬくために、一生を傾けた。その作品は、前記の全甲社から出版したが、斯界に独自の感化を残したといえよう。

◇大東亜戦に利用される

時勢は移って、支那事変がひきおこされ、更に大東亜戦争に拡大して、国を挙げて戦時体制に入ったが、昭和十六年には、小学校は国民学校と改称され、翌十七年には、日本少国民文化協会が組織されて、児童の世界も全面的に戦争完遂に参加することになった。

特に紙芝居は実際の利用価値をそなえているので、出征軍隊や疎開児童の慰問に利用され、更に敵愾心を高揚する道具に一役買って、例えば、昔話の桃太郎は、いわゆる鬼畜米英を退治するために、犬、猿、雉を従えて遠征するというような紙芝居がつくられて、実演されたりした。

更に昭和十八年には、日本少国民文化協会紙芝居部会によって、紙芝居台本に対し、企画審査が行なわれるようになったことは、いかにその影響力が重視されたかをものがたるものといえよう。

終戦直後は、あらゆる方面が虚脱状態に陥いったが、児童文化もその例に洩れなかった。紙芝居もそのあおりを受けて、一時はひっそりしたが、二、三年後には、東京では、業者が千人を超すようになった。

当時はアメリカの管制下にあり、あらゆる方面に厳重な取締りが行なわれたが、街頭の紙芝居も放置されてはならないと、東京都庁社会教育課内に紙芝居倫理規定管理会が設けられ、毎月一回、作品を審議するとともに、その指導が行なわれた。

この行きかたは地方にも及んだ。筆者のいる栃木県でも、その頃、県の方針として、県内諸市に、管内の紙芝居業者を集めて、作品の趣旨や、作りかたの方針や　話しかたの心得などを述べ、座談会をひらいて意見を交換する会がひらかれて、たびたび立会わされた。

◇テレビに取って代わられる

かくて、紙芝居は以前のような状況になるとみられたが、テレビという新しい文化が輸入されて、凄まじい勢いでひろまった。どんな山間でも、海辺でも、居ながらにして、さまざまな興味ある題材を見られ、聞かれるようになったので、わざわざ外出して、飴を買って、紙芝居を見る必要がなくなった。それに都市においては、交通事情の混雑のために、表でおちついてなにかを見ているような余裕がなくなった。そんな事情から、

紙芝居はいつとはなく街頭から姿を消すようになったのである。

けれども、紙芝居そのものに対する興味がなくなったわけではない。特に幼児には訴えるものがあるので、現在は専ら幼児保育の施設において利用されるようになった。幼稚園保育時において、紙芝居をしないところはないだろう。そこで、子どもたちはよろこんでたのしんで見ている。もし、やめれば、必ず催促されるだろう。

だから、それを製造販売するところは、専門的な研究と丁寧な仕事をするようになり、以前にくらべると、一段と進歩した。けれども、まだ充分とはいえない。更に工夫と改善をする必要があることはいうまでもなかろう。

◇紙芝居に芝居はない

終りに、一言つけ加えたい。

それは「紙芝居」という名称である。「芝居」すなわち「劇」とは立体的なことばである。だから動きを含み、変化を含むことばである。

いかにも、以前の、竹の柄がついた両面の人形は、不充分ではあるが動きもあり、したがってそれ自身の変化も示された。

けれども、一枚の絵になると、平面的で立体的ではない。だから、いささかの動きもないし、変化もない。ありのままでひっぱりこまれる。それは動きとか変化とかいうのでなく一枚の「おしまい」なのである。そうして別な一枚が変って出てくるのである。

だから、見るものは、順々に別なものに接するのである。そこには直接なつながりはないし、連続した変化もない。はなればなれの連絡に接するだけである。

これを「芝居」とはいえないだろう。

詳しくいえば、絵によるおはなしを聞くともいえるし、おはなしによって絵を見るともいうべきだろう。だから、これに「芝居」という名称を与えることは不適当であり、不適当という以上に、不合理ともいわれるだろう。

そういう状態が許されて、別に不合理とも感じられないのは、内容が変ったのに、形式が変らないので、名称が自然にそのまま受けつがれたためである。だから、はじめてこれに接して、その呼称を耳にするものはへんに思ってとまどうだろう。「芝居はどこにあるのか」と。

正に「芝居」はないのだ。

あるのは、絵と話である。だからこれは、「絵ばなし」と呼ぶのが適当ではなかろうか。

（鹿沼幼稚園）

東京の幼稚園今昔

山村　きよ

日本の幼稚園創立90周年を迎えて、東京の幼稚園界の今昔をかいてほしいとのこと、よろこんでペンをとったものの、想いは43年前の保育科在校時代、戦災で焼け残ったお茶の水校舎あとや、バラックでの不自由ではあったが楽しかった学生生活まで、走馬燈のように、目の前にはっきりと浮んできて、とても10枚の原稿紙にはおさまりそうもないので、私の関係した公立幼稚園研究会のことのみにしぼって記してみたい。

私は卒業後千葉市に奉職したが、東京に知人多く、ことに東京市の研究会にはたびたびよんでいただいたり、お茶の水での研究会にはかかさず出席していたので、その間多くの知人から伝統ある東京の幼稚園のことや（その園長先生たちにも知人があったので）古い幼稚園のこと、研究活動など耳にしていたので古い歴史をちょっと記してみたい。

明治時代に創立された由緒ある幼稚園は次の通り、

○麹町地区、麹町幼（明治17・3・15）同、富士見幼（20・4）
　同、番町幼（22・11・22）
○京橋地区、京橋朝海幼（21・9・28）
○日本橋地区、常盤幼（28・4・7）同、坂本幼（28・3・30）
○本郷地区、本郷誠之幼（文京区立第一幼稚園＝20・6・1）
○下谷地区、根岸幼（22・1・8）
○麻布地区、中之町幼（22・5・3）
○四谷地区、四谷幼（大正2・3・1）

以上10園で、ここに通園するこどもたちは上流のこどもが多く、保育料も1円～1円50銭といわれ、しかも当時の先生方の給料は15円～18円であったとか？

園長は麹町地区と麻布地区のみ兼任で他は女の専任園長で、

そこは永く専任園長がつづき立派な伝統もつくられたということである。

以後だんだんと公立幼稚園が増設され麹町幼稚園に、故、土川五郎先生が兼任園長として就任された時は東京市の幼稚園は17園だったとか、（大正12）それでも研究体制をととのえて研究活動を開始されたとのこと、それが現在の東京都公立幼稚園教育研究会の前身ともいえる。（その間一時中止されたり、名称の変った時もあったが）

私が昭和11年5月、千葉県から東京市に出向命令をうけて赴任したところが麹町区富士見幼稚園で、小学校の三階が幼稚園の独立園舎のような感じで幼稚園の通用門は靖国神社に近い道路につづいていた。当時の公立幼稚園は約30園余り、しかしその大部分が併設幼稚園で、保育内容も「やさしく教えこむこと」のみ多く、一日の保育時間が五項目の配列で終ってしまい、朝の大切な時間が殆んど小学校と同じように「朝礼に参加することで終る」など驚きの連続であった。

しかし当時は倉橋先生の唱える「幼児の自発活動尊重」「自由遊びのまとめ」「朝礼廃止」などなど、私の先輩後輩が倉橋先生のご指導をまじめに現場へ持ちこんで、研究しておられる先生方もかなり大ぜいおられたために私も夢中になって「保育形態の研究」にうちこんだ。兼任園長の多い東京市の保育会は年々盛んになって一ヶ年に一回は各区競って研究発表会をもつような自主的研究活動も盛んに行なわれていた。また当時の特徴としては兼任園長の殆んどが運営のすべてを主任保姆にまかせている幼稚園が多く、保育内容は勿論、区役所への交渉その他主任保姆の活躍場面は広範囲にわたっていた。

東京市の公立幼稚園といってもその区財政はまちまちで俸給も初任給35円～40円、人件費、研究費、主任手当などさまざま、こうした運営の独自性が幼稚園の発展向上にも大いに関係があったように思う。

私の勤務していた麹町地区も皆さまから羨ましがられた場所で、区内4名の兼任園長たちがそれぞれ財源をみつけてきては施設設備を拡充したり研究活動にも応援してくださって、しかもすべてを主任保姆に一任して下さったので活発な研究活動が始まった。園内で使う「幼児体操の創作」「レコード集め」「人形劇・紙芝居の作成」などなど、昭和16年頃までは実に楽しい研究にあけくれた保育者生活で今から考えると夢のようである。

一方では倉橋先生の「保育法真諦」や「幼稚園雑草」の中の講演、雑誌の記事などからだんだんとこどもの見方が変ってくる幼稚園が増し、幼稚園の「朝の一とき」の大切なことがわかってきた先生方から「朝の集まりを中止しよう、一斉保育はやめよう」など論議の中心となることも度重ったが、併設幼稚園

の多い東京市の状態では兼任園長から「幼稚園は教育の場所である。自由遊びは放任と同じだ」ときつく戒められる若い先生方もあって、ついで「保育案の必要論」に発展したように思う。

お茶の水の講堂で度々開かれた講習会でもこの「自由遊びの取扱い」「誘導保育」の実際問題になると、いろいろな質問がとび出し、時には倉橋先生に向って「先生のお話はよくわかります。でもやれないので、先生が一週間位保育なさるところを見せてほしい」などの暴論も出て、先生を苦笑させた場面が今でもはっきり目に浮ぶ。

私たち東京の研究会員はまじめに先生のお話ととりくみ、何の関係もなく五項目をばらばらに配列していた日常保育をだんだんと生活主題によって組み合せることに話し合ったり、紙芝居やお話の背景として、レコードやピアノ伴奏を利用することなど新しい試みを研究し合ったものだ。そのためには本郷第一幼稚園や、麻布の中之町幼稚園を会場にして各区から若い先生方を2、3名位ずつ研究部員として出し、回数を重ね、実際保育にはずいぶん役立ったように思う。

主任級の者は本郷第一幼稚園長の檜山京子先生（現在、草野）を研究部長として現場の記録をまとめる仕事をした。「観察」をテーマに年間指導計画表を作成するために、地域、場所、季節、あそびの材料などのバランスを考えながら宿題をもちより、それをもとに各々の園で、実際に保育した記録をもちよって、とうとう年間指導計画なるものを作成したのに、大部分は火災で失ってしまった園が多いようだ。

また本郷第一幼稚園の近くに、弘田竜太郎先生がおられることを知り、数人の者で、簡単な作曲や、歌唱法のご指導をうけた。自分の作詞で歌ができ上って歌う喜びはほんとうに楽しい一ときで、ここでもピアノをひきながらお話を演じてみようと（ひきがたり式）しばらく研究会をつづけたが（2年位）小人数のためにいろいろ困難な問題もあって中止のやむなきに至った。

その頃麹町区では夏休みにこどもたちが規則正しい生活をしたり、母親と家庭で教育的あそびをしてもらうために「なつのあそび帖」を編集した。それを東京市の保育会の仕事として保育会の仕事も「劇あそびの脚本集」創作とあわせて大きな仕事になり、この「なつのあそび」は戦後、保育用品取扱店が目をつけて、現在では色刷りの立派なものが商品として出版されているが、東京都公立幼稚園では現在でも、各区選出の委員によって編集され安価で配布される仕事が続いている。

昭和16年12月、遂に太平洋戦争となり「小学校令」は「国民学校令」と改められ、東京のように併設園の多いところでは毎日の保育内容保育形態がどんどん変化していった。

個人的な生活をみつめて指導計画を立てるというよりも常に

「指図に早く適応する生活態度の育成」「集団訓練」などに全力をあげていたように思う。

倉橋先生のお説もこの頃から少しずつ変化し、雑誌に書かれる記事からも「おや…」と思うようなことにもぶつかった。

私の園も靖国神社を利用させていただいた誘導保育など及びもつかぬことで、毎朝列を組んで靖国神社に詣で出征兵士の武運長久を祈る姿と変ってしまった。そして更に悲しい事実は、5月30日(昭和19)戦時臨時措置法によって「公立幼稚園休止」となり、園長、教諭はもちろん、大ぜいの保護者と園児によって「涙の閉園式」を行なった日のことが、ありありと目に浮ぶ。そして一切の保育施設は閉鎖されたが一部の地区には戦時託児所として残り、6月には近県に集団疎開地をさがして小さい幼児たちが親もとを離れて行った。教職員もそのままの身分で区役所の学事係に、又は東京市役所に職場替をしたり、またある者は学童疎開の寮母となって東京を去った。私は一生をかけた仕事にあわれな終りをつげて長野県の山奥に両親と共に住み移った。しかしまた、思いがけなく戦後東京に再出発の道が開けた。昭和25年頃から、幼稚園ブームがおとずれて一ヶ月に15園位ずつも私立幼稚園が誕生し、あれよあれよと思う間に、公立幼稚園は私立幼稚園の1/10になってしまった。

しかし公立幼稚園も、千代田、中央には全小学校に附設され、台東区などもだんだんと増設の気運にはなったが相変らず東京市の中央部僅か8区にのみ公立幼稚園があり、文京区などは昭和26年まで第一幼稚園一ヶ所のために、8倍近くの入園希望者が5～6年間も続き園長をいためつけた時代でもある。(私もその一人で、いろいろとおもしろいエピソードもある)

昭和25～27年私は東京市港区西桜小学校教諭の身分で、幼稚園専門の指導員を命ぜられ指導部勤務となって市内の公立幼稚園の先生と研究会をもつ機会が多くなったので、私の30年来の夢である、「幼、小、連絡協議会」を教育庁指導部主催や、区の教育委員会主催で開いていただくことができたのに、ご参加くださる小学校側の先生が数少なく、しかも午前中の実際保育が終ると殆んど帰ってしまわれる方が多く残念なことこの上もなかった。しかし僅かに残られた校長先生や、指導部の他の先生方から「現在の小学校低学年の先生方が、幼稚園の先生ほどに環境づくりにファイトをもってあたってくださったらどんなに一年生の勉強が楽しくなるだろう」とはげまされることが多く、まずまずほっとして、よろこび合ったものだ。

このことは私ばかりでなくいろいろの先生方が手をつけられ「幼年教育研究会」「幼小連絡懇談会」などあちこちにもたれたが、同じような状態でなが続きしないようだった。(つづく)

(聖徳短期大学)

座談会

誘導保育の成立のころ（昭和初期）

司会　津守　真
出席者　及川　ふみ
　　新庄よしこ
　　菊池フジノ
　　徳久　孝
　　他

津守　皆さんお忙しいところ、お集まりいただいてありがとうございました。今年はちょうど幼稚園創設九十年の年であり、現代の幼児教育の基本形ともいうべき誘導保育の始まったころ、すなわち大正末期から昭和の初めのころの様子をお話しいただこうと思って集まっていただいた次第です。

先ごろ出版された倉橋惣三選集の第一巻に掲載されている『幼稚園保育法真諦』は、初版が昭和九年に出版され、第一篇、第二篇、第三篇は倉橋惣三先生が書かれたものですが、さらに第四篇〝誘導保育の実際〟というのが本当はついているのです。それは、当時附属幼稚園でやっていた誘導保育の実際を、現場の保育担当者が書いたものです。幸いに今日は、その執筆者である及川先生、新庄先生、菊池先生、徳久先生にお集まり頂くことができましたので、その頃のことをめぐっていろいろおはなしいただきたいと思います。こんなに早い時代に既にこんなに新しい保育をしていたということは特記すべきことと思いますので、是非その実際の状況も紹介したいし、また皆さまが今それをどのように見ておられるかということなども伺えると、大変参考になると思います。どうぞよろしくお願い致します。

（この第四篇の誘導保育の実際例として、新庄よしこ「旅へ」と、徳久孝「わたくし達の自動車」の一部を抜粋して、この座談会の後に掲載してあります）

及川　ああ倉橋選集にはこの第四篇は載っていないんですね。そう

すると、新庄さんの「旅へ」と「人形のおうち」が菊池さんね。それから三が「大売り出し」ね、「大売り出し」は神原さんだったかしら。それから「わたくし達の自動車」

菊池　それが徳久先生の？

徳久　はい。

及川　大きい自動車でしたね。

徳久　今見ると、何とも旧式な自動車です。

津守　それで及川先生のはここに載っていないけれど。

及川　ええ、私の誘導保育はこれには載っていないから（第一ページのカットをさして）せめてこの藤棚を描いてくれとおっしゃって、それで園庭の藤棚をちょっと描いてみたんですよ。

新庄　ああそうですか。

及川　で、あなたの「旅へ」は昭和七、八年ですか。

新庄　ええ、そうらしいわね。

及川　私ね、いつからこういう誘導保育らしいまとまったあそびをするようになったかしらと思って考えてみたら、震災後、バラックの保育室の時ですね。ちょうど徳久さんが実習科にお入りになったあのころからボツボツ始めて、保育室のすみっこにおもちゃ屋さんだとか八百屋さんだのっていうのを、つい立てやコーナーを利用して小規模にやったのが最初ですね。それからだんだんそういうようなことが発展したようで。

菊池　そうですね、もうバラックの時に、箱のおうちで作った街ね、あれの写真がありますし、それからおもちゃ屋さんの写真もありますものね。

及川　そういう風に、ごく初歩はバラックのころで、本格的にやり出したのはこの園舎に移ってからだと思います。

菊池　初めのころに、砂箱がありましたね。

及川、新庄　ええ、ええ。

菊池　ちょうどあのころ、聖橋（お茶の水駅付近）ができたでしょ。それで私、最初にあれを砂箱でしたおぼえがありますの。そしてあの幼稚園のおばさんに、「大野シェンシェイは粘土をたくさん持って行って困りヤンス」（笑）なんてしかられたのおぼえてるわ。あのころおばさん、粘土を糸でちぎってはひとつずつくれていたのに、聖橋の分量だけ下さいなんていったものだからしかられたのね。まあそれも、誘導保育の初歩ですね。

新庄、及川　そうでしょうね。

菊池　それをしたのと、それから動物園をしたのをおぼえています。砂箱で小規模にね。

新庄　本当に砂箱が重宝でしたよね、他のものがあんまり無かったのですもの。

及川　堀先生が向こうに行ってお帰りになった時に、あちらの幼稚園や何かでは、部屋の中でサンドボックスをやっているような所があるっておっしゃったのから、砂箱を作ったのです。

菊池　ちょうど、この机ぐらいじゃないでしょうか、大きさは。

新庄　あれで、魚つりあそびをずいぶんしました。それから、てんとう虫をたくさん並べて、虫の家をしました。

菊池　あの砂箱、きっと物置にまだあるんじゃないかと思うんですよ。

及川　各部屋に一つずつあったんです。砂が入ると重いので、足に車がつけてあってね、普段はブリキだかトタンだかのふたをして、いろいろこしらえたものを並べたり置いておくんです。

新庄　まあ部屋に余裕があったわけね、あのころ。今じゃ、各部屋に材料がゴチャゴチャあるでしょ。あのころは何にもなかったですものね。

及川　とに角、何かああいうまとまったあそびをするのには、相当材料が必要なんですよね。だから計画を早くたてて準備をしなければならない。

新庄　そうそう、そうするとまた、その計画の中から思いつきが出てくるの。そうするとそれでまたひとつできて、それからそれからと続いて行きますからね。そこが、その誘導保育っていうんでしょうか、そういうふうに各部屋で先生が考えを次々とまとめていったわけですよね。

菊池　で、あのころやった誘導保育、もっとないかしらと思うんですけれど、なかなかたねがないわねえ。(笑) 汽車ごっことか。

及川　誘導保育にするのに都合のいい、子どもが活動をたくさんできて、子どもに興味があって、それからこちらで用意できる材料っていうのは、やはりいくらか制約がありますね。

私は、こっちの園舎に移ってからは組を持たないで皆さんのしていらっしゃるのを見る方が多かったでしょ。そうすると、こういう主題でやろうということでしていらっしゃるやりかけの様子を見ていると、まず先生がとても楽しいらしいわね。子どもに入る前に、もう先生自身がおもしろくてたまらなくて、それでやっぱり先生が中心でその興味をもって進んで行ったのが多いんじゃないでしょうか。おしまいごろになると、子ども自身から出発することが多いですけど。

津守　本当に、これを読むともういかにも楽しさが紙の上にあふれているんですね。それで今ここの幼稚園でやっている保育を見てからこれを読むと、あ、このころの誘導保育にそのもとの形があったんだということを思うんですよ。

徳久　こう思い出してみて、とに角楽しかったということだけはおぼえています。

§　旅　へ

及川　どっかにかいてあるでしょ。(本を見ながら) あの汽車の中の情景で、窓の絵だったと思うけど、あれの写真ないかしら。

津守　その「旅へ」っていうの、それが一番最初に載ってますから、新庄先生、そのころのおぼえていらっしゃることなんか、少し輪郭をお話し下さいますか。

新庄　これは一番先に書いてあっても、私がこれを始めたのは、「人形の家」だの「箱の街」だのそういうものがあって初めてその考えが私にも思いついたからなんです。それが「旅へ」という誘導保育で、これはいろいろと発展して行くひとつの大きな題になると考えたものですから、次々として行って、やってるうちにまたいろんなことが出てきてね、もうしょっちゅう大塚の駅なんか見て歩きましたよ。(笑) そうすると、荷物だとかいろいろ気がついて……。

及川　（本を読みあげながら）売店、改札口、切符売場、荷物受付、はかり、食堂、駅のお弁当売り……

新庄　ええ限りなく出てきたものですから、それに制作が入っていったわけで、それでもうずいぶん長い間あそびました。どこでもあそべるんですのよ、これ。

津守　今のものよりも、何かこう規模が大きいみたいですね。手先だけで作るのではなくてね。

菊池　そうですね。

新庄　あのお弁当のごちそうなんかも、のり巻きなど何でこしらえたらいいかしらと思って、ずいぶん考えました。

及川　そのお皿でも、粘土でこしらえたり紙でこしらえたりね。

菊池　その「旅へ」っていうのは固定していなかったわね。どこでもできましたものね。あの材料はとても融通が利くのね。

新庄　そうなの。それでずいぶん長い間あそべたわけですの。でもね、とに角こういうことをするのは、やはり大きい組にならないとできないわね。入園したての子どもは、やはり個々の手技というものが必要じゃないでしょうか。はじめっから誘導保育っていっても、小さい子どもに誘導保育は、私、無理だと思うんです。

菊池　なかなかね、ある目的を共通の目的で進むのだから、やはり三才児なんかにはまだ無理ですわね。

新庄　できませんわね。それから四才でも、終りごろにならないと無理ですね。

菊池　そう、年長組ですね。

新庄　そこでやっぱり手技とか、そういうのがもとになるんじゃないでしょうか。ですからただ誘導保育といっても、一口にはいえませんわね。そのもとがありますから。

§　人　形　の　家

津守　人形の家は、どうやってできたのですか。

菊池　私はいなか育ちでしたから、子どものころよく竹やぶだの杉林に行ったんです。いなかですから縄だの板だのあるでしょ。それで竹と杉の木とつないでこうして板をわたして、これは誰ちゃんのうち、こっちは誰ちゃんのうちっていうふうにしてあそんだのです。その二階になった所に床があって、これは私のうちだなんていって、それがとってもおもしろく、夜になってもうちに帰れなかったんです。母に、もう入れないなんていわれて、戸をしめられたこともあるくらい楽しかったんですね。それで、それじゃ都会の子どもなんか、そういうことをしたらどんなによろこぶかしらと思ってね、それがヒントで人形のうちをやってみたのです。もうひとつの自由になるうちっていうのね、子どもが。そういうのどうかしらと思って、ま、何も考えず自分のいなかでの育った時の状態を思ってやったら、大変に子どもがよろこんでね、あのHちゃんのお母さまなんて、もうかかりっきりに板をもってきて下さいました。

及川　あれでは菊池さん、ずいぶん苦労しましたね。屋根をこしらえたり、それから牛がいたじゃありませんか。（笑）この牛だってずいぶん骨がおれたんじゃないの？　工夫して。

菊池　いつか倉橋先生に、どうしてこの牛を考えついたっていわれたんですの。私、あの時、アメリカン・チャイルドフッド・エデュケイションという雑誌が来ていたでしょ。あれを見た時に、何かに馬が作ってあったのでそれにヒントを得たのです、そして最初馬小屋をこしらえたんですよ。そこはバラックの便利さで、どこへでも釘が打てましたものね。

新庄　ああそう、それが牛になったの。(笑)

菊池　ええそれが牛にね。でもはじめは馬をこしらえましたよ、リンゴ箱で、あのバラックの海の組のすみにね。

ちょうどこちらへ引っ越しの時だったんです。それで暮にね、私もう、その人形の家はおいてこようと思ったんですの。いろいろトラックで運ぶのに、そんなもの持ってこられないからって。そうしたら倉橋先生に、いやそれが一番大事なんだから持って行けっていわれて、とても感激したんです。先生にはこれが大事なんだ、ああそうかと思ってね、とても嬉しかったですわ、その時。

新庄　ほんとにずいぶん大きなものでしたわね。あなた、高島屋かなんかに出したんじゃないの。(笑)

菊池　あの時菅原先生が高島屋の顧問だったのね。

及川　それで二人で高島屋に行ってお人形のうちをこしらえてもらって、お人形ももらいましたね、ほら着物を着たあれ。

菊池　私がこしらえたおうちはこうひんまがっているんですよね、素人だから。だけど高島屋ではそれを見て、ちゃんと専門家が作ってくれて。それでそれをやき直して、今度こっちへ移って行啓の時なんかに、したんです。

及川　まあとに角、子どもができる材料を見つけるのが苦労ですよね。本当のものを買ってくるのなら楽ですけどね。

新庄　このごろは本当のものができてますから考えなくてもすんじゃうのね。

菊池　私あの時、鳩時計を考えましたでしょ。あの分銅を松かさでしたのが嬉しかったですわね。包み紙のひもをこう結んでくさりにして、松かさを茶色にぬって、そして鳩時計って引っぱるとギッギッとなりますね。あの工夫をした時、嬉しかったですねえ。

新庄　だからもう何でも、見るもの聞くもの、幼稚園の保育室の中にあれを持ってきてどういうふうにして子どもがそれを扱ってあそんでくれるかっていうようなことが、年中頭の中にありましたねえ。(同意)

菊池　だから私、あのころ浅草で、エノック・アーデンの映画がありましたね。それを見に行った時に、その中に出てくる子どもが釘だるをこういうふうにしてその中に乗ってあそんでいるのを見て、ああこれがいいな、ここの幼稚園の庭をみんな動物園にしたらおもしろいなんて思ったことがありましたよ。鮭の木の箱なんか見ると、ああこれはワニにいいとかね。(笑)

及川　中味を出して、入れものだけほしくなっちゃうのよね。

津守　本当ですね。買ったものと違って、ひとつひとつの材料が、心がこもっていますね。

徳久　お人形のうちのベッドだの椅子だのがだんだんはやって、このごろではあれがひとつのコーナーにできあがったのが出てますでしょ。きれいですけど、味がないですね。(同意)

菊池　私のあの不細工なうさぎの耳の椅子ね、あの時楽しくて、うちに帰ったのは夜の十一時ごろでした。（笑）

及川　あの当時、先生が夢中だったのよ、子どもがよろこぶ前に先生が大よろこび。

菊池　のこぎりミシンていうのを買っていただいたでしょ。子どもに輪郭を描いてもらって、それでこうやってこしらえてね。

及川　そうそう曲線を切るのにね。ミシンと同じ足ぶみなの。切るのは私ずいぶんひき受けたわ。

新庄　楽しかったわねえ。

及川　先生がまず喜んでしてる、子どもがする、それから今度は、ここでは親たちが送り迎えをしますでしょ、でその途中を見ているものだから、そこへまたひきこまれて、「こういうものがうちにございますから、先生何かお使いになりませんか」なんてね。そういうのでだんだん材料が豊富になっていくわけですね。

菊池　そうですね、おうちの方たちも持ってきて下さいましたね。

§　わたくし達の自動車

徳久　私のこの自動車の時も、塗料屋さんの父兄がペンキだかラッカーを下さったのでそれで外に出してもぬれないような色がぬれたんです。

新庄　すばらしかったですね。

及川　徳久さんの自動車はすごく大きくてね。（笑）もう四人位で動かさなければ場所が変えられなかったのよね。（笑）

菊池　何世紀かの自動車だわね、今見ると。（笑）外側は緑色じゃなかった？

新庄　なかなか大変よ、これ。それで動いたの？

徳久　動いたんですよ、だから喜んじゃった。

菊池　押して歩くのね。

徳久　初めは部屋の中で作ってたんです。それからエッサエッサ外へ運び出して、それで外で動かして遊んだのです。

及川　〝山の組〟と書いてあるわ、この自動車号は。嬉しかったでしょうね。

徳久　ハンドルは何か幼稚園にあった古い丸い棒をやっぱり糸のこでこう切ったんです。子どもがいろいろ考えてくれますね。まだこれが足りない、まだこれが足りないって。

津守　今こんな大きな自動車なんて作りませんね。

徳久　作りませんねえ。

津守　どうしてですか。（笑）

徳久　今日出てくる時に、ちょっと私がアルバムを持ってきたので、幼稚園で見せて「これ作ったんだ」といったら、先生たちなかなか本気にしないんですよ。「こんなの作ったらいいですね、誰が作ったのか」っていうから「先生と子どもですよ」っていったんですけどね、でも作りたいようなことといってましたがね。

津守　今はどうしてこんな大きなもの作らないんでしょうねえ。

新庄　いろいろまにあってるからじゃないのかしら。

菊池　あんまりおもちゃがたくさんあってねえ。

新庄　ええ。そして幼稚園でこういうものがっていうと、すぐによろこびそうなものを作らせてしまいますからね。

菊池　そうなのね。

及川　そういう風に商売人にこしらえさせると、もう何だか味がなくなってしまうのね。

（アルバムを見ながら）大人だってのれそうね、二人位。

徳久　ええ、のれましたよ、私。

及川　ここにかいてありますよ、三円十三銭って。

新庄　でもそういう値段が書いてあるのもいいことね。

津守　だけど、よくこうやって写真が今とってありますね。

徳久　私自分でとった写真ですの、スナップ。

菊池　そのころは皆自分でとったのね。もう幼稚園の先生は、写真屋さんはだめだと思いましたね、あのころ。自分でおもしろいところをとらないとだめだと思って、なけなしの財布をはたいて、私も、新庄先生が持っていらしたのと同じフレックスを買ったんです。

新庄　幼稚園用にすぐ買ったんですよ。

津守　ずいぶん新式ですね。

菊池　私のは中古で百五十円でした。でも戦争の時防空ごうに入れたんですよ。そうしたらあれはジャバラがのりづけですね。それでだめになってしまいましたけれど。

徳久　もう次から次へと発展して行きましたね。（同意）

新庄　そう、そこが誘導保育の一番大切なことね。

徳久　子どもが考えてくれるし、先生ももう全く外に出ると、あのころは自動車ばかり見ていました。（笑）

菊池　誘導保育でも長編と短編がありますわね。よく砂場なんかでも田植えのところなんかをしていましたね。あのころ、そういうのは、まあいくつかあって。

徳久　短いのね。

菊池　ええ、やっぱり短編と長編があるんじゃないかっていう気がしますね。年令やその時期によってね。

津守　そのころは、子どもの人数はどれくらいですか。

菊池　戦前は定員が三十人でしたね、それでお休みなんかあると、二十五人から二十七、八人で。

新庄　そのくらいがいいわね。

及川　材料なんかも、いろんな物資が豊かになって工夫する余地が無いので、あのころのように特別な味がなかなか出ないですね。

菊池　本当にそう思いますね。

及川　もう規格品が多くて。

菊池　私、人形芝居の舞台でもそう思うんですが、初めはわくだけでやってたでしょ。そうしたら業者が作るっていうので、できてみたら、何だか彫刻したみたいなのがついていてね。

及川　あのころはもうひとつも既製品は無いんです。材料から方法から、それをみんな自分たちが工夫するところに興味もあったし、できた結果も味があるんじゃないでしょうか。やっぱりそういうふうにするから、活動面も多くなって、子どももその中にひきこまれて先生と一緒になってやるのね。だからあんまり満ち足りた時期の子どもは、かえってそういうことを知る余地がないのね。

津守　今ここの幼稚園で使っているもので、そのころ作ったもの、そのままでなくても、結局それが伝わっているといったものがい

ろいろあるわけですか？

及川　このごろどうなさったかしら、堀合さんが、おままごとのついたてを、石油箱をはがしていくつにもして作ったの、あれこのごろもありますか。

菊池　黄色くぬったのね。

及川　ええ。

菊池　あれなくなったんじゃないかしら。

及川　ああいう味のあるものがないのね。あの柵にしても、先生は本職の大工さんのようにはできませんでしょ。いびつだったりいろいろと。そこに何ともいえない、子どもとピッタリ合う感じがでるのね。規格してキチッと大工さんがこしらえたような、ああいう柵じゃおもしろくないの。

菊池　そうね、柵も、私たちが作ったものは、こうひんまがったり、片寄ったりしててね。このごろのはもうちゃんとできてるから、いつだって立派なのがあるけれど……。

及川　何ていうのか、子どもの素朴さがうばわれたようでね。

§　誘導保育と現在

及川　どのくらいかかったでしょうね。あなたの「旅へ」っていうあそびは、どのくらい続いたかしら。

新庄　そうね、もう一学期間はずっとね。

菊池　そうそう寒いころもやってましたね。

及川　結局まあひとつのものを作るにしてもどっかに行ってちょっと調べてきたり、材料を集めてきたり、実際に子どもと一緒にしたりっていうような段階があって、相当日数と時間をかけているんですね。だからひとつのテーマをきめれば、もうそれは本当に一学期続いていくっていうようなことで、そこに活動する子どももそれほど目まぐるしくやらないのね。ゆっくり進んでいくの。

菊池　小さいテーマが次々に進むから、子どもはあきませんわね。今度は自動車を作ろうとか、今度はラジオを作ろうとかね。

津森　一週間や十日じゃ終らないですね。

新庄　とてもとても。それじゃもうほんの断片的な、ある一コマしかできませんものね。さっき私、大きい組でなければって申しましたけれど、虫の家をした時はあれ小さい組だったんです。

及川　子どもはいわれた一部分をしているんだけれども、結果はそういうまとまったものになって行った時に、自分がみんなしたような気持でよろこぶのよね。（同意）

菊池　で、その小さいものひとつずつ集まってひとつのあそびにするっていうのは、今だって三才だってやりますね。たとえばおもちゃを作るでしょ。それをその日一日で持って帰させると、倉橋先生は〝ちぎれ保育〟とおっしゃったわけです。だからそれを「じゃあこれこんなにできたから、おもちゃ屋さんにしましょうか」というような形にもっていけば、できるんじゃないかしら。

新庄　そうね、そこがやっぱり先生の力ですわね。

菊池　今だってできないことはないし、持って行き方ですね。

新庄　でもまあ、ここの園舎に移ったころは、本当に最高潮でしたねえ。（同意）

及川　ちょうど、バラックが焼けたあとで、何も物はない、どうせ

買い整えなければならないっていうような、まだ蓄積するはじめでしたからね。

菊池　私今考えてみると、非常に自分は無鉄砲だったのね。勝手なことやってたみたい。

及川　卒業したてで、勇敢だったのね。

菊池　それに因習が無かったわけなの、焼けてしまって。

津守　で、戦後の誘導保育っていうのは、どうでしょうね。

菊池　規模が小さいですね。おもちゃ屋さんとか、動物園とか。

徳久　何ていうんでしょう。ひとつの単元の展開みたいのが、いわゆる誘導保育みたいになっているんじゃないですか。

菊池　そうなのね。規模が小さいと思いますね。前のが大きすぎたのかしらとも思ってみたりしますが。（笑）

及川　でも何ていうかしら、そういうふうに興味っていう面からいうと、大まかな長く続くものがいいんですけれども、やっぱり、どんどん変化を求めるっていうような保育あるんじゃない？　ひとつのことを長くやっているとあきるし、だからそういう面で、割に展開が早いんじゃないかしら、一学期もやっているような誘導保育なんて、ないでしょう。

菊池　そうですね、あれはひとつの題だけれども、内容が、今度は食堂を作るとか、今度は切符売り場だとかいろいろあったから続くんだけれど、ひとつの小さいものだったら、やっぱり子どもの興味ってものは、そう続かないでしょうね。

津守　先生の方も、ビジョンていうか、こうまぼろしが大きくなれば大きくなるし、それが小さいと小さくなるんではないでしょうか。

菊池　そうですね。

及川　やっぱり、人間全体的に忙しいんじゃない？（笑）

菊池　そうですね、まわりがね。

津守　菊池先生の文章にも、ちょっと終りの方に書いてありましたね、その誘導保育をやっての反省は、何かものを作りあげるというところに中心が行ってしまって、子ども一人一人が見失なわれやしないかということを反省しましたっていうような意味のことが書いてあったようですね。

でも私ね、本当にこれを読んでいると、とてもスケールが大きいから、何だかこう今やっているのが貧弱に見えてきまして。（笑）

及川　部屋でもね、あの時分、部屋がいっぱいで、せまいくらいでしたね。あの自動車が一台入ってごらんなさい。子どもは小さくなってなきゃならない。（笑）

津守　どうして今そういうことができないのかしらと思うと、進歩してるんだか後退してるんだかわからないような気もするんですけどね。どうなんでしょう。

及川　人がふえて、ふつうの住いもそうなってるでしょ。アパートや何か。今までは広いうちに住んでいて、あそびもそういうふうにできていたんじゃないでしょうかね。

菊池　世の中全般の風潮がこういうことになったんでしょうかね。

及川　それに今幼稚園の数も多いですしね。そして外と中の研究会研究会でね。だからそういうふうないろんな意味で、子どもとの

いろんなあそびっていうことが、ずいぶん侵蝕されているんじゃないかしら。

徳久　人形芝居の人形でも、ああして一生けん命コツコツ作りましたでしょ、今作るひまもないですね。（同意）

及川　あなたも主任していらっしゃるから、いろんなことの責任があるでしょ。だからそのあそびだけに、没頭できないのよね。その意味で、なりたての先生に大いにやっていただかなければ。

一同　そうね、そうそう。

菊池　あんな人形を、下駄屋から桐くずを買ってきてコツコツ作るなんていう人は、今いないですからねえ。

津守　本当に今、誘導保育なんていうのんびりしたことをやってる所は少ないでしょうね。

徳久　こんな大きさじゃないですけど、まあやってますけどね、小さい規模ですね。

及川　割合に早く、どんどんちがったものに移って行くのね。

徳久　そうですね。まあ動物園とか何とか、大きな動物を作ったりなんかしても、場所がせまいから。

菊池　そうですね、並べておけませんものね。

及川　今、こうしてお話するだけでも、楽しさがよみがえってくるわね。（同意、笑）

新庄　本当ねえ、その思いついた時の嬉しさってないの。

菊池　そう、嬉しかったですわねえ。

及川　部屋毎に何かやってるんですよね。

新庄　決してとなりと一緒じゃないんですものね。

及川　それに、たいしてお金も使わなかったわね。（同意）

§　誘導保育と単元学習

（坂本彦太郎先生登場）

及川　お留守におじゃましまして、あの誘導保育の楽しかったことを話してたんです。

津守　そういう楽しさをいろいろ伺って、やっぱりね、昭和七年、八年ごろが、皆さん一番楽しい最高潮だったっていうことで。で、それがちょうど今のこの本の第四篇の主題なんですけれどね。

坂元　それは、一九三二年～三年なんですよね。アメリカでは、いわゆる進歩主義の教育運動っていうのが一番盛んだった時代なんです。で、その具体的なあらわれは、いわゆる単元学習と今いってますけど、昔だったら作業単元といっていたもので、ああいう種類のことが非常に発達した時代なんですね。それで、外形的にも本質的にも、皆さんが誘導保育としてやっていらっしゃることが、非常によく似ているんです。それが、二つとも文章で読むと、実質的形式的には似ていながら、動機というか目的というのがちょっと違うんです。例えばアメリカ流で行くならば、子どもなり幼児なりの経験とか活動というもののあるまとまりに帰してある。これは幼児にはあまりやらないんですが、小学校から中学校位の段階でよくやるんですが、どちらかというとそういう子どもの活動のまとまり―もう少し率直にいえば、子どもの計画的な自発的な活動っていうようなものを中心にしたような、そういうまとまりなんです。ところが、こちらの先生方のは、実際やって

いることは非常によく似ているのだけれども、意識的には子どもは、皆と一緒にそう簡単には遊べない。そのような子どもをうまく遊びの中にひきずりこむ手段というようなのが、非常に強く出ているでしょ。そういうはっきりした目標をもった作業単元だという所に、非常に日本流のおもしろいものがあるんじゃないかということを、私こんなこと、生まれて初めていうことですけれど、感じるんですよ。

及川　ああいうあそびをしてるとね、何もしないでただいるっていう子どもはいませんね。何か自分でやろうと思う。自分の適材適所を見つけて働いている。

坂元　やってることはね、一つのまとまったものをずっと展開するんで、そのやってることがら自体は、少しも違わないんですよ。ただ裏にある考えというかな、目あてというものにちょっと違ったところがある。で、日本のは非常に実際的なんですね。子どもたちがうまく遊べない、入ってこない者のためにしつらえてやるんだという気持が大変に強い。これは論理から見たんで、先生たちはそういう理屈でおやりになったのではなくて、やっぱりアメリカ流の、子どもの活動っていうようなものをおもしろくやるということの方が中心であって、そしてそれを俗人に説明するために、便宜的に方便的に倉橋先生がいわれたんじゃなかろうかというようにも感じるんです。

津守　いや私もね、先生方が楽しい楽しいといわれるのは、やっぱり先生のそれだけのエネルギーというか活動力がそこにあふれているわけで、そこにまた子どもの活動が加わってくるという、そういう心理学的にも、非常に説明のできることだと思うんです。

坂元　その子どもの楽しい活動と先生の楽しい活動とが一体となったものを、いってらっしゃるんでしょうね。そういう考え方があ作業単元という考え方の一番の基本的なものなんですね。で、現実にはそうやっているにもかかわらず、遊びの中に引き込むとか何とかいうことが書いてあって、誘導という名前のつけ方が、ちょっと違ってるわけなんですね。

津守　そうですね。その点がちょっと違いますね、あのユニット・オブ・スタディと。

坂元　だけども、現実はもう誘導じゃないんですね。もう向こうもこっちもとびこんでやっていらっしゃる、そういうものをいってらっしゃるような気がするんです。今もちょっとお聞きしただけでも、そんな感じがするんですがね。

津守　それで今ね、昭和七、八年からその後の発展を少し話していただいたんですけれど、戦争中はそれがやはり少し下火になって、それから今度は戦後は、規模が小さくなってきてるというような、ま、大体大づかみにしますとそういうようなお話だったんです。で、やっぱり昭和七、八年のころは大きいんですね。

一同　ええ。

津守　今日は、その当時の誘導保育のことをいろいろと伺って、大変ありがとうございました。現代の幼児教育が、形はととのっても、先生と子どもとのたのしさを失うことがないように、先生も大きな夢をもって、規模の大きな創造的な保育ができるように進んで行くことを期待したいと思います。（昭和41年5月17日）

旅へ
―東京駅から―

新庄よしこ

夏休みのある日、どういう続きあいで、そうなったのか、今はすっかり忘れてしまいましたが、とにかく幼稚園のことを何ということなく考えつづけておりました時、ふと、あの東京駅の構内が眼に浮んだのでございます。そうだ、あの乗車口に一足はいれば、改札口がある、切符売場がある、荷物受付、自動電話、売店、郵便局、待合室、つづいて食堂、あの大きな時計、ポスターの数々。そう考えつきましたら、その中のどれでも保育室に結びつけて、先生と幼児との協同作業が、かなり長い間つづけられるような気がいたしました。そうだ、あれをやって見よう、とそう考えが決りましたので、落ちついてその一つ一つについて、もくろみを立て、大体の見当をつけてみました。ここで東京駅をそっくり保育室内に移した場面が、おぼろげに私の頭の中に出来上ったのでございます。これがちょうど第二保育期を目前にした夏休みの末のことで、是れからが私も子供達も仕事にとりかかる大事な時期だ。是非やって見よう。だが此の総てを決して急いではならない。修了迄の間にすべて完成すればよい。売店をまずはじめにして次は何にしようか。食堂は年長組のいつごろがいいかしらなどと、保育案のあら筋だけをたてたのでございます。

そこで、九月、第二保育期が始まって二、三日目から、いよいよこの計画をすすめてみました。この時には余程この仕事についての目的なり、計画なり、方法なりがはっきり具体的に私にも解ってきておりましたので、次のようなことを考えられるようになったのでございます。

一、一つの仕事が年少組から年長組へと引きつづいて出来る作業であって、次から次へと展開し得る可能性があり、個々と

しても作業価値がある。またその個を総合すれば、東京駅という一つの大きな仕事となり、そこから更にいくらでも伸び得られると思うが、さてどう変って行くものであろうか。

一、先生と幼児の協同作業、と云っても、私が主になって進めて行かねばならぬから、常に次に取りかかる仕事を考えておくこと。又生活活動を主にした作業は、どうかすると活動にのみとらわれて、手技を忘れがちになり易いから、どこかにこの活動に関係した手技を十分入れて、一人一人の製作力を伸ばしていきたいこと。

一、これは最も興味深い汽車あそびから始まったことであるが、ただ遊びとしてばかりでなく、日々実際に行なっている事実をそのまま持って来られること。

一、年少組はその心配もいらないが、年長組になると、一つの店だけ、例えばおもちゃ屋だけにすると、売り買いは、売り手買い手の人数が少数に限られてしまい、どうかすると、組での勢力家に独占され易いものだが、売店、切符売場、食堂などでは動く人数を多く要するから、自ら組全体のどの子にもそれぞれ活動の機会を与えることが出来る。

以上が、仕事にとりかかる前に思い浮んだことです。

これからのことは、右の計画を実際に行なってみた経過を順序のままに記すのでございますが、その間にも考えが変ったり、止めてしまったり、途中で思いついたり、そうする為には相当の理由もあるので、それらを織りまぜて書きとめて置きたいと存じます。

売店、改札口、切符売場、荷物受付、はかり、食堂、駅の弁当売、ざっとこういう順序でございます。

売　店

まず最初に売店を開くことにしました。この頃にもなれば（年少組の第二保育期）子供一人ずつについて、大体この子はどういう子であるということが、受持に解っておりますので、計画した仕事に向って、一人一人を適当に動かすことが出来ますし、子供の方としても幼稚園生活に慣れてきておりますから在園中を通じてこれからが一番仕事に向って専心力を注がせ得る時でございます。従ってどんどん仕事を沢山与えて伸ばすことの必要な時でありますから、紙を材料とする手技製作として売店の種々の品物を次から次へと作らせ、それを次から次へ店に置いてみようとこう考えました。

改札口

とりたてて申せば、これは、子どもが毎日自由遊びでしています。切符を買って入口からはいり、切符を渡して出口から出

る、あの事実を充実してやることで、これは先生の製作の方が多うございます。材木屋から約八センチの角材を買って来て組立て、ニスで塗りました。柵と柵とは鎖でつづけました。鎖は、有り合せの黒い新モスを、おちゃんちゃんの紐のようにして、輪にいたしました。入口出口の札は、何でも宜しく、こういう場合幼児であるからときっと、カナにする必要はないと存じ、そのまま入口、出口として置きました。入口の方に一人の幼児が切符切りを持って立っており、客の出す切符に鋏を入れ、出口の方にいる幼児は客から切符を受取ります。初めはお茶の水のバラックで始めましたので、どうせ引越しするのだからと思い、柵を立てるのに、床にじかに打ちつけましたが、新園舎に移りましてからは、建物に一本の釘をうつこともしたくないと存じ、立てる方法に困ってしまいました。他用で来た大工さんに相談しました処、すぐ、立つように作ってくれました。床にじかに打ちつけたのとは違って、どこへでも移動出来ますので、この改札口は遊びの動くままに、室内なり、或は庭なり、室から庭への境へなり、気に向いた処に持って行かれて大層都合が宜しうございます。

切符売場

窓の高さを幼児の背に比べて作りましただけで、外には大した工夫もありません。是も組立ては先生の仕事で、釘を打つこと、塗料（エナメルで、表・緑、裏・白色クリーム）を塗ること、窓口の網を針金であむことなどが、幼児の仕事となりました。是を使っているうち、切符を置く棚や、時日を入れる設備（板と板との間にちょっと切符を挿してから売る）などがほしいという幼児からの注文で、後から加えました。

「熱海まで、二枚下さいな」「満洲……一枚」

「大阪、大人と子供です」「子供は何枚」

「子供は二枚下さい」こうして切符を買っております。

嬉しいことには、組の中でも至って無口な、どうかすると、二日も三日も口をきかないといった、そして常に一人遊びばかりをしている子供が、ここでうれしそうに窓口に顔を出して友達と話しているのが度々見受けられるようになったのでございます。今迄話をしない、友達とは遊ばないと入園以来看板をかけて来ていたので、私が見ると、眩しそうな様子をするので、わざと知らん顔して室を出たりしたこともありますが、此頃ではそんな遠慮もいらなくなりました。

切符は、画用紙で、始めは大きさも定めて、行先を書いたり、ミシンを入れたりしておりましたが、じきに使ってしまいますし、大急ぎのときは間に合いません。それ程急にこの切符売場が利用されて、「じゃあ切符買って来よう」と云っては飛

んで来ますので、一々作っては間に合いません。この頃では画用紙の書き古しをためておいて、大急ぎで切っては与えております。

大時計

大きなもの、確りしたものと思って、板にしました。四十センチ四方のベニヤ板を(十五銭)四角のままに使い、数字はエナメルで幼児に画いて貰いました。針は同じく細い木で自由に動かし得るようと云っても、真中に釘一本打つだけでよろしいので、駅の為にと作ったものが、お弁当の時になれば、椅子を持って行ってせのびしつつ十二時を指したり、お帰りには、誰かが飛んで行って一時半にいたしております。時計そのものを知らせるのは早うございますが時刻の観念位はそろそろ始めた方がいいと思いまして、時には私から何時ごろでしょうねと、この素朴な大時計の針を動かして聞いて見ることもございます。

電　話

東京駅には電話が沢山あるよとある日子供が申しましたので、それでなくとも一度電話を室において見たいと思っていましたこととて、早速、あき箱でおかしな物を作ったのですが、どうもわれながらみっともなくて、でも子供はそれで相当に話をしておりました。新園舎には余り不似合なので、材料費の余裕が出来ました時に電気屋に相談しましたら、（玩具屋にあるのは余り小さいので）店の若い息子が面白がって、自動式の、鈴のなるのを作ってくれました（二円五十銭）。それを二人で話し合う声がそのまま聞える程度の距離に備え付けました（線で話の出来るのは余り高価になりますので）。幼児は順々に待っていてさも通話していると云う格好で……。

「あした大阪に行きませんか」

「あした東京駅に来て下さい」

「今日サーカスに行きませんか、大急ぎでね」

その頃はサーカスばやりでサーカス見物へ誘う電話はひっきりなしです。電話ばかりでなく、ちょうどあの五、六月頃は何でもかでもサーカス、動物の玩具を出して来て、積木で一つ一つの動物小舎を作り、動物つかいの上手なM、T、Y、など毎日毎日幼稚園に来るなり、虎をおどらせる、象に芸をさせる、ライオンに輪をくぐらせます。私達も面白くなって、レコードをかけて景気をつけたりしました。間もなく小さい人達が、庭側の入口からゾロゾロ見物に来る。すると、駅のキップ売場が忽ちサーカス用となってお客さんに切符買っていらしゃいと命じる。買った子は入口からはいって、動物の近くで腰かけて見物、終ると出口から帰る。小さい組の人達が一ぱいなので、

「僕お菓子買って上げよう、キャラメルがいいね。たばこも買って来て上げる」というわけで、このサーカス興業中に売店の品物は殆んど売り切れで、又新しく作り直したようなわけでございました。是が一週間もつづきましたろうか、あんまり、お祭り騒ぎもどうかと存じ、ソーッと動物をしまったようなわけでしたが、ほんとうに面白うございました。その時、電話が駅のものとはすっかり関係を離れて、家の電話に使われておりまして、大抵はお台所の御用です。

「肉を百匁持って来て下さい」

「バナナを一チョウ大急ぎで持って来て下さい」

一方でリンがなると通りがかりの子が大急ぎで電話口に出るのを屢々見かけました。誰とも遊ばない、自分からは口を開こうとしない子が、誰もいない時、一人で電話口に向っている時など、大急ぎで私が片方になり電話でその子に話しかけて、思いがけなく話し合いの出来たこともございました。

荷物受付

どこの駅でも荷物をあずかっておりますし、旅への必要品でもあり、荷物受付の有様を考えて見ました。大きな行李、トランク、ふとんの包み、菰包み。そこで先ずトランクから始めようと思いつき、私が一つ作って見ました。幼稚園引越しの時拾って置いた電気用具の空箱、ダンボールの大きいものでした。これに、提げる所は、靴屋で不用になった皮を買って来て（三十人分五十銭位）両端を鋲（足二つの）で止め、角の飾り皮は茶色模造紙。これを一つ作っておいて、それから子供の家からなるべく大きい空箱を持って来て貰って、一人ずつ自分のトランクを作らせました。大きい物には、アメリカとか、イタリー・フランスなどと紙を貼りました。今迄おぼろげに聞いていたのが、国の名であることをはっきり意識したようでした。

こういう時の空箱に、電気用具の空箱、扇風機とか、ストーブのはいっていたものなどは何に使ってもいいようで、堅くて小さい普通の空箱よりも、ダンボールのものは、大きいことや、ザクリとした手ざわりなどが、幼稚園の製作に適当でございます。食料品店などにも沢山ありますので、買ってもお安いもの、大ていはただでも貰われましょう。

トランクだけではきまりすぎるので、菰づつみや、小包式のものなど荷札をつけて四つ五つ作っておきました。是等は何れも軽いので子どもが持ち上げて見て軽うございますと実物から来る荷物の感じを減退されますので、適度の重さをつける必要があると存じまして、不用の古い絵本などを入れて重く作りました。

この雑然とした荷物を汽車に積んで、荷物列車にすることが

よほど嬉しいようで、幾度か繰返されております。「この荷物にはガラス（ガラスで作ったものの意）がはいっているから大事にしてね」と一人が云うと、ソーッと持ち運びしていまして、取扱注意が自然に行なわれていることなどを見受けました。

この鞄の中に、自分のほしいものを作って入れさせたら、手技製作にも面白いものが出来ると思いましたが、ここでは余り微細になることを避けて止めておきました。その代り、何か入れるものが欲しくなった時には売店から買って来ては入れております。

はかり

駅の荷物受付にはかりを使っていました。

おぼろげになりとも重量の観念を得させたいと思いまして、前々から、何かの方法ではかりを使って見たいと思っていました。或時は、お砂糖屋さんでもしてみようかなどと思ったこともあったのですが、今も手をつけないでおりました。ちょうどこの駅で、荷物をあつかっていますので、それと関連してと考えました。その後、毎日の往復に駅での台秤を見ては、工夫もしてはみましたが、これは幼児には不適当に思われましたので、やっぱり天秤がよいと思い、幼児の背丈に合せて、私共でこれを作ることとし、約十センチの角材を真直に立てて、これに横の桿をつけたものでございます。

分銅は大小数々の石を布切に包んで、重さに応じて取りかえられるようにしました。

前にも述べましたように、むずかしいことや、細い目盛りは無頓着にして、石の分銅と左の荷物の重みの平均によって、物をはかることのあそびをいたした迄でございます。

私としては何年も前から考えていたこのはかりが、駅の荷物あつかいというまことに所を得た機会にもって来ることの出来たのが大きい喜びでございました。

食堂

六月になって、ショクドウ、セイヨーケンという札も出しました。主事が喰いしんぼうだと、違ったものだと通りがかりの先生に笑われました。

食堂をしてみたい、とはかねがね思っていました。御馳走をこしらえて、お客さんが食べに来て、コックさんがいて、註文の品を運んで来る給仕さんもいてと、それがちょうど汽車のあそびで、食堂がほしいとか、お弁当がどうとか申しますので、まず看板を出したのでございます。衝立で室をしきってここを食堂にして、テーブルには白いきれをかけておいて、それから食料品の製作にかかりました。

駅のお弁当売り

汽車が動き出してから、やたらに売店の品物を持って来ますので、別に、首から下げる箱へ、お弁当やら、アンパンやら適宜の品を作って入れました。

去年の夏私が頭の中で考えた時と、それからつづいて幼稚園で実際にしてみました今、思いの外に子供が動いてくれますことによって、次へ次へと、又新しい方面にも展開して行きました。まだまだ伸び得られるのでございますが、修了を控えた今、他の方面にもちと力を注ぎたいこともございますので、惜しいと思いながらここで打ち切り（仕事だけは）ましたのでございますが、其後も売店での売り買い、入口出口の往復、食堂ごっこといった所謂幼児の生活活動は間断なくつづけられております。売店にしても、キップ売場にしても食堂にしても、あそびは時は定めておりませんので、心の向くままに任せて置きます。

又、この仕事でよかったと思いましたのは、前にも申しましたように、店一つのような時は兎角組での勢力家に主要役目を独占され易うございますので、先生で按排しなければなりませんが、この仕事では活動する場所が方々にございますために、大きく申せば一時に組の子全部が活動し得られるということでございます。

こうして参りますと、食堂にはいる時はきっと自分の抽出しから財布を出して来て、食べてしまうとお金を支払う。切符を買う時は鎌倉、大阪、神戸と嘗て自分の行ったことのある行先をいう。もし是が後二年迄もつづいてゆかれるものなら、汽車の時間表と時計と、賃金と数と、地方の名称と文字と、構えずして自ら伸ばし得られて、保育へのなだらかな流れに向けられるような心地がいたしました。

そうして、幼稚園時代の子供は他愛のないもの、手応えの無いものとのみ思っている人々にこの様子を見せて上げたいと思います程、その活動が発剌としている上に、食堂での註文の仕方、荷物の扱い等実に確りしたものでございます。これらの仕事に対する子供の動き方を一人ずつながめておりますと、これが遊びとは思われない程の真剣味があふれております。ごっこというのは売店や食堂の活動を表わすに最もいい言葉であるとは思いますが、どうもそこには軽やかな感じが多分に含まれているような懸念もございまして、どうかと思っております。むずかしいことを申すようでございますが、つまりは大人から見れば淡く見えても幼児自らは活動をつづけております、その力に私が動かされて幼児の活動をあらわす言葉迄、ついいろいろと考えてしまうのでございます。（昭和八年十一月記）

わたくし達の自動車

徳　久　孝

この四月から大きい組になりました子供達は、製作にお遊びに、目立って変って参りました。先生なしでもよくお外で遊べるようになりましたし、製作では木工等を非常に好むようになりました。

『先生、僕に金槌貸して』

『僕に鋸頂戴』

と、朝お室にはいると直ぐから大工道具の請求でございます。ちょうど金太郎の立絵をする為に、めいめいのお家からお菓子折の空を持ち寄りましたが、蓋だけを立絵に用いまして身の方が残りましたので、早速これで飛行機、電車、ロボット等色々の物が作られました。

何時もよく喧嘩をする子達が、お互に木をおさえ合ったりして、永い時間飽きることなく続けております。こんなに皆が木工に興味を持っているなら、独りひとりの製作もよいが、共同して大きな製作をして見たらどうかしら。ちょうど先学期、女の方にお人形さんを作りましたので、お人形を連れて遊びに行くことの出来るような物を作りたいと思いました。或日電車作りの一団のお手伝いをしながら「この電車に乗れるといいわね」と申して見ますと、

『うん、いいね、大きいの作れば乗れるよ』

『じゃ皆で作りましょうか』

『そうだ、作ろうよ』『作ろう』と男の子達はすぐに賛成してくれました。

『先生この板でいい』と木片の一端を持って、もう作る積り

でおります。

『その板は弱いでしょう、だから皆が乗ったらすぐ折れてしまいますね。材木屋さんに行ってもっと丈夫な板を買って来て作りましょう』『そうしたら、僕に切らしてね』『僕にもね』と、忽ち予約です。

『それでは電車、汽車、自動車、どれにしましょうね。友達皆さん御相談して見ましょう』と言うことになって、早速ご相談を始めました。自動車、電車、汽車、ケーブルカー、飛行機、タンク等色々出て来ましたが、自動車が一番多いようでございましたので、自動車を作ることに決りました。

『いいなあ、乗れるような大きいのを作るんだって』

『嬉しいね』と子供達はニコニコして、暫くの間色々な自動車のお話しで持ち切っておりました。それから二、三日の間、型を考えたり、設計をしたりしてごたごた過しておりますと、

『先生、自動車どうしたの』『まだ作らないの』と矢の催促でございます。これでならいいと、兎に角子供が乗って動かせるもの、五、六人乗って毀れないようにということを条件として、いよいよ製作に取りかかりました。実習生と一緒に、或子供は材木屋さんに、或る子供は釘を買いに出掛けて、皆の顔が希望に輝いているかのように見えました。板が参りますと、子供はもう大喜びで、私共が赤い鉛筆で線を引いて上げるのももどかしく、板を切ったり、釘を打ったり致しました。

ちょうど五月の月に入って、すがすがしい五月晴れの日が続きましたので、お室の中で大工さんもしたい。然しこのよい天気にお外に出なくては、と思いましてお庭に大工机やら、板を運んで致しましたことも幾度かございました。背中一ぱいに五月の陽を浴びて、お友達に持って戴いたのでは足りなくって、自分が板の上に乗り、顔に汗を一ぱいにじませて切っている光景は、本当にほほ笑ましいものでございました。

この製作に取りかかりましてから約二ケ月、子供達も私共も、忙しい、張り切った日々を過して参りました。

「明日の朝迄にどの位出来ている」と楽しみに帰って行きました子供達の為に、少しでも余計に作って置いてやりたいと、汗びっしょりになって、暗くなる迄トンカチトンカチ致しましてすっかり疲れて帰りました日も幾日かございました。けれども、これは本当に愉快な疲れでございました。私共は大体乗用車の積りで設計をして作って参りましたが、子供達はその時々によりまして、乗用車にもなれば、乗合い、デパートの送迎車、円タク、貨物自動車等色々の物に致しております。

（本誌二頁写真参照　昭和七年七月記）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

和田　トヨ

表題によって何かを書くようにというお話を頂きました時は、お受けしようかどうしようかと迷いましたが、遠い過ぎたことを思い起してお話することが、今のこのうるおいの少ない競争意識旺盛な世の中で、幼い人の教育に当られる若い方たちに、何か心のやすらぎを感じて頂ければ、年寄の昔話も無駄にはならないでしょうと存じ、ボツボツ話すことを、代って書いて貰うことに致しました。と申しますのは私、昨年秋以来年のせいで、少々手足が不自由になりまして、こまかい字が書けなくなりました。と同時に記憶も不確実だったり、話し方などもおわかりにくいことがあると思いますのであらかじめ御了承頂きたいと思います。

さて、幼稚園創設九十周年と申しますことは、我国で幼稚園がおよそ一世紀の歴史を残したということです。その最初の頃に幼稚園に通われた方は今も御在世ならそれこそ百才にお近いことでしょう。そのことに比べますと私共の目白幼稚園はまだまだ若い方で、昨年やっと五十周年を迎えたばかりです。創立に当りましては、当時お茶の水におりました園長（主人―以上園長）が、自分の健康上のこともありましたが、どうしても官学から離れて自分の力で理想の教育をしたいという念願から始めましたので、無資産の者が大それた考えのようでしたが、坪二銭の土地を借り、大正博覧会の事務室の一部を五十円で払下げを受けて大正四年の秋建て始め、屋根ができた時台風で屋根全部吹き飛ばされるという一幕もあって、やっと大正五年一月開園の運びとなりました。

当時、幼稚園に子女を通わせる家庭は中流以上の家庭で、今程に普遍的ではありませんでした。最初の年は、宮内省へおつとめの方、お医者さま、大地主さんのお子さんたちでただの三人、このお子たちが三ヶ月で卒業したあと四月からは十人位、後、年々少しずつふえ、昭和の初年頃までは三～四十人位が普通で少人数の行届いた保育ができました。現在の最初からマンモスの幼稚園を計画され実施しておられる方々には想像もおつきにならないことと思います。距離的には勿論全部歩いて通うお子さんたちです

が、幼稚園を中心に円を描くとその半径が現在の約三倍〜三倍半位の大きさになります。それ位遠くから皆毎日つき添いがついて殆ど休むことはなく、かよったように思います。

保育方針は当時も今も殆ど変りません。昨今大変新しいことのように殊更に叫ばれてきていることは、創立当初の五十年前から園長が行なっていたことで、その五十年の間には、いろいろの意見や学説もあったようですが、私共では一貫して子どもを楽しく充分に遊ばせながら心身の発達の手助けをし、個々に躾をするということに徹してまいりました。躾は叱ってするのではなく、先生が身を以ってお手本を示すという方針です。その為か開園以来今日に至るまで、幼稚園がいやになってやめたというお子さんは一人もおりません。戦時中は幼稚園にも随分軍部、政府の圧力が加えられましたが園長は一向意に介せず、この子どもたちが大きくなる頃には戦争は無くなる、子どもに戦争は関係ないという意見で、戦争ということを取りたてて話もしなければ、また特にかくすということもなく平静に保育を致しました。それでも通園途次は防空頭巾をかぶったり、警報に対する訓練などは生活訓練として自然に知る機会があるわけです。何事も自然に無理のないようにということでした。

創立当初は、洋服を着ている子どもさんは殆どなく、男の子は紺絣の着物に羽織、女の子はお被布（ヒフ）などを着て可愛かったものです。一時白いエプロンが流行して肩から吊る白いエプロンをかけるお子さんがたくさんあった時もあり、大正末期頃からだんだん洋服になりました。保育室は床全体にゴザを敷き（当時は百貨店の三越も床は全部ゴザと絨毯が敷いてあって、靴の人は靴カバーをかけて貰い、下駄の人は草履にはきかえたものです）机は最初から六人掛の机と椅子で、遊戯室は、一方の壁は全部子どもの高さの黒板、一方の壁は大きな一つの額になって、ある時は先生が季節によって絵や工作でその額をうずめたり、またある時は子どもの共同製作を飾る場所に使ったり、時には専門の画家さんに描いて頂いたこともありました。

おもちゃは充分に与えなければいけないという園長の持論のもとに、積木、色板、糸通し、箸輪、組織などの恩物やままごと、おてだま、人形などを充分に用意しましたが、後には机の上の恩物の積木のほかに長さ一米のもの、その½、¼、⅛、更にそれの三角にしたものなどの大きな積木をたくさん用意し、子どもたちはそれを全身で積んで遊ぶのが何より楽しいことのようでした。

また粘土細工、豆細工もよくしましたが、粘土は今のような油粘土ではないので、大きな瓶に土の粘土を一杯入れて置き、堅く固まっているのを、使う二、三日前から水を適当に入れて、軟かくしてたびたび様子を見ては、ぬれ布巾をかけて使う時までにちょうどよい堅さになっているように用意したものです。豆細工もやはり前日から用意するものの一つです。この豆細工は最近殆ど見られなくなり、一時きび殻を切って豆の代りに使うことをしま

した。この場合は、豆と違ってきび殻の長さを自由に切って変えられるので、子どもそれぞれの工夫によって出来上るものの種類も多く、変化もあり色彩にも富んでいました。しかしこれも近頃あまり使われていないようです。

戸外遊びは最も子どもの喜ぶことで、できるだけ外で遊ぶことを奨励することは今も変らないことです。大きな砂場、竹で組んだ枠登り（ジャングルジム）、ブランコ、二人乗りブランコ、遊動円木（これはあぶないので後に固定させ平均台のような遊び方に替えた）なども今と大して変りませんが、現在の私共の所は、戦後復興後は学校と一緒ですのでまことに手狭で、幼稚園の遊び場が不自由で、子どもたちがかわいそうです。昔は同じ場所でも、築山あり池あり、池の中の金魚は自然に冬を越し、四季折々の草花や植木が花もつければ実もなるという環境でした。小さな築山でも、おにごっこにかけ登ってはかけ下り、追いかけてと変化があり、またたくさんあるつつじの株のかげはそれぞれかくれんぼうの屈強の場所というわけで木をいためるなどということはめったにありませんでした。キレイに咲いている築山のつつじの蔭や、藤色の房の長々と下った藤棚の下、よく茂った生垣に添って咲きみだれる山吹のそばなどに子どもたちの笑顔が三三五五重なり合っている風景は、私共目白幼稚園だけでなく最近の都内の幼稚園ではあまり見られないのではないでしょうか。今昔の感一入というところですが、時代のせいとばかりいい切れず心痛めております。総じて子どもの遊びは昔も今もそう大して変りません。幾分科学的になったこと、テレビの影響で一般に理屈っぽく物識りになったということでしょう。天真爛漫という子どもらしさを保つ期間がだんだん乳児期に近い方にせばめられて行くように思われます。

おべんとうについては、今ではどこの幼稚園でもしていらっしゃるでしょうし、またそれぞれの工夫もなさっていることと思いますが、私共では昔からおべんとうの時は、レコードをかけて名曲を聴かせておりました。その頃のプレーヤーはゼンマイ仕掛けの小廻しの蓄音機で大きいラッパがついておりました。

おもちゃのことでは、私どもが初めて飯田町に世帯を持った頃（明治三十八年）、高市次郎さんが九段の中頃に玩具のお店を出しておられました。高市さんはもともと、教育畑の方ですし、園長もまだその頃はお茶の水につとめており、お互に意気投合し教育玩具の改善研究ということで毎日のように高市さんが家にこられ食事を共にしながら恩物の研究やら幼児に与える玩具の研究に余念ない有様で間もなくフレーベル館を始められたのです。高市さんは後にヨーロッパへも再々行かれ、フレーベルを詳しく研究され益々斯界に貢献されたことはフレーベル館の名が全国の保育関係者の間に広く親しまれていることでもおわかりのことと思います。昭和六年に私共が下落合に保母養成所（現東京教育専修学校）と第二目白幼稚園を設立しました時には、フレーベル館―つまり

高市さんが、机、椅子、黒板など、中の設備を御寄贈下さり随分お力添えを頂きました。然し戦争が次第にはげしくなった頃、高市さんはフレーベル館を人に譲って郷里に引込んでしまわれ、私共も学校も幼稚園も焼けてしまいました。戦後大分経ってから高市さんは再び上京されチャイルド社を設立されましたが、もう大分お年を召しておられ、昔程の意慾はみられませんでした。園長が亡くなりました時には昔の追憶談をなつかしそうにして下さいましたが、今はその高市さんも故人になられました。

高市さんのお話で忘れてはならないのがキンダーブックです。幼児の生活に大きな役割をする絵本について、当時市販に出ているものには、真に幼児を理解して書かれているものは殆ど無いといってもよい状態でした。それで園長が高市さんに相談し、園長の指導によって観察絵本としてのキンダーブックが生まれたのです。当時の吉沢廉三郎先生や、武井武雄先生がいまだにお描きになっていらっしゃるキンダーブックはフレーベル館のトレードマークのようになつかしいものです。

園長がまだお茶の水におりました頃、長男がお茶の水の幼稚園に通っておりましたので保育実習科の生徒さんたちが名前を間違えて長男を「みのるさん、みのるさん」と呼びなさると、長男は「みのるはお父さん、僕はみちお」という会話が何度も繰り返されたと、その頃実習しておられ今は故人になられた坂内ミツ先生がよく話して下さいました。坂内先生はお茶の水本科の理科出身の方でしたが、幼稚園での実習以来のおつき合いで、ずっと幼児教育にたずさわられ一生を終えられた立派な先生でした。次男が幼稚園に入る頃から目白幼稚園ができましたので、次男も次女も目白幼稚園でした。朝おべんとう持って出て、幼稚園が退けてもお迎えがこないし、おとなしく遊んでいるので他の先生が「おうちはどこですか。お迎えはいらっしゃらないの？」と聞いてもだまっているので不思議に思っていたら園長の子どもだったという話もあります。

割に近い話では、確か支那事変が始まってからのことですから、昭和十二年か十三年のことです。東京で世界教育会議が開かれ、日本では初めての催しで上は大学から下は幼稚園までの世界各国の教育者が東京に集まった時幼稚園からは園長が選ばれて、私も一緒に出席しました。通訳は彰栄の石原先生がして下さったと覚えています。倉橋先生も御一緒だったかとも思いますし、または園長一人だったのかその辺のところは覚えておりません。世界各国の関係者の中で、印度の御婦人方が特に印象に残っているのはどういうわけでしょう。また芝の藤山雷太さんのお邸に全員招待されましたが、純日本の建築、庭園、茶席は勿論、田舎家まであったのを覚えています。とに角戦争で記録を全部焼いてしまいましたので、公のことではっきり覚えているものが少なくて残念です。お約束の紙数を超えました。また機会がありましたら想い出して置いてお話致しましょう。（目白幼稚園・東京教育専修学校）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

倉田　ミチ

お茶の水幼稚園創設九十周年にあたって「幼児の教育」誌上に昔の想い出を書くようにとのお便りをいただき、非才の身をもかえりみず、おぼろげながらも記憶をたどって綴ってみることにしました。

風雪六十年といっても、私には、大正十五年の幼稚園令発布もついこの間のような感じがしてなりませんが、幼稚園の変遷を振り返ってみた時、教育の内容面、経営面でも数々の人のこと、物のこと、あるいは社会の出来事など時勢の流れにそって、幼稚園のあり方も、その折々が走馬燈のように想い浮びます。

昔、山口には、二つの小学校附属幼稚園がありましたが、郡合で廃園となったので、時の小学校長が明治三十七年、今から六十二年前に亀山公園の麓に知事の認可をうけ創始されたのが、私の幼稚園のそもそもの始まりであります。もう一つは町の北部に外人経営のミッション幼稚園があって、明治二十九年頃の創設と聞いております。当時、いずれも四十名位の園児を収容しておりました。

規定園児数　園の幼児数は、幼稚園令施行規定により、百二十人以下とされ、特別の事情のある場合のみ二百人まで許可されておりました。保母一人の保育する幼児数は約四十人以下とされ、園児は、一年、二年または、三年保育が混合になっていました。

恩　物　恩物は、折紙、お絵かき、組織（くみおり）、豆細工、縫取り、遊戯、唱歌、粘土細工などフレーベル恩物やモンテッソリー教具などで感覚教育が行なわれ、その内容は、視、聴、味、触、嗅覚の練習や色彩教育資料もあっておもしろく遊んだ時代もありましたが、製作品は、大人の模倣が大部分で高度の模様を組立て、細い神経をつかって、指先の技術の習練を主とした扱いであったように思います。

材料は、現在も同じ物を使用していますが、取り扱いやその目的表現の方法などは、大変な相違のあることは申すまでもありません。また、色板をならべて模様をつくったり、積木遊びに便利

なように黒塗りの机の面に、二・五㎝四方の方眼線が碁盤の目のように彫りこまれた町立時代からの園児用机が今なお少数残っております。

園児の服装　明治末期から大正にかけての園児の服装は、まちまちで和洋両方あって、男子は、背広または羽織袴を着し見るからに小公子然としており、女子は、祝祭日の式には、大人同様黒紋付にエビ茶の袴またはドレスにボンネット、ふだんも袴をつけていた子どももあり、絵でみる鹿鳴館時代の名残りといった感がありました。何れも整った身なりをしていて、中流以上の家庭で恵まれた環境の中に育ち、父兄もその姿に憧れてほこりを感じておられたように思います。

先生の資格　小学校正教員の免許状所持者かまたは女学校卒業者が認可幼稚園で一年間実習につけば無試験検定がうけられ、また検定試験をうけて免許をとる法もありました。保母養成機関のない時代には、最も近道である無試験検定希望者を代用保母制限外の顔をして、一年間みっちり勉強させて本採用に引きあげ、職員組織も規定通り編成することができました。

保育運営面での想い出の行事

1　**臨海保育**　昭和四年頃から戦前まで、毎年夏季休暇の一日を親子連れ海遊びを計画し、山の子によい経験の場をつくっておりました。今日のようにバスの便もない時代でもあり、学校の計画にもなかったので家族連れで参加し、お互いが心から楽しみ合う年中行事となっていました。一行には、看護婦、写真師など引率も多方面の方々が加わられ楽しい想い出の行事でした。

2　**茶話会**　今のように給食のない時代は、月数回、全園児を集めて茶話会を開き、特に種まきから収穫まで、鉢植えのソラ豆について観察させ、最後にその豆で豆飯をたいて全園児によるだんらんの場をつくったり、また十二月二十三日は皇太子初のお誕生の年から引続き今日まで毎年赤飯をたいてお祝いをすることにしています。今では裕宮様のお誕生日もお祝いしたいと考えております。

　その他、自作のカボチャや大豆や花垣の一隅にできた餅米で餅をつき、アラレにして節分に豆まきをしたり、会食したり園児も先生も心に通いあう楽しさを味わっていますが、三十幾年もよくつづいたものだと不思議な位であります。

3　**凧あげ**　全園児自作の凧を持って、はだ寒い広場で凧あげ会を催していましたが、現在のように家が建てこんで子どもの遊ぶ広場もだんだん狭められてきたのに引きかえ、昔は右も左も安全交通でのびのびと百余の凧が、青空に群り飛ぶ光景は、今でも懐かしく真に壮快な遊びでありました。

4　**白衣勇士の慰問招待**　昭和十八、九年頃は運動会や雛祭遊戯会などには白衣の勇士を招待したり、病院へ慰問に出かけたり当時の国情を反映して、幼き者にも心うたれる何ものかがあったこ

とと思います。

戦争犠牲者　永い間、幼児教育に携ってきた中で人とのつながりにおいて、最も悲しい想い出は何といっても園育ちの戦争犠牲者のことです。前途ある優秀な青年となって、あるいは特攻隊員として、あるいは動員学徒として、陸に、海に散華してゆかれた勇士のことであります。今もありありと、あの子、この子と幼な顔や在園当時の想い出など想い浮べて痛ましさが胸の底からついでてきます。

若葉会　昭和七年頃、有志がたびたび集まって熱心に子どもの日常の問題について話し合う場がもたれるようになり、次第にお母さんと先生との間に親しみの度が深められ、さらに盛り上って、運動会や雛祭りなどにはバザーが開かれるようになり、その純益で有益な講演会や親睦のための旅行などが計画され、その活動はめざましいものがありました。

今の当園の若葉会（P・T・A）結成もこの会が素地をつくりあげたものです。当時の園児たちは、今は三十七、八才の立派な社会人として、組織の中堅として各地に散在活躍しておられます。

若葉会創設当時の最高幹部の方々が十八名位おられ、今もなお親交厚く時々会合してお互いが往年を語り合い孫自慢の語り場となって生き甲斐を感じる仲間同士となっております。ちなみに、親・子・孫三代、またはご一族十人目の在園児のあることも珍しくありません。

保育料等　大正末期まで保育料、入園料ともに一円でしたが昭和の初めから一月五十銭から二円となり、今から考えますと今昔うたた感慨ひとしお深いものがあります。ちなみに昭和七年関西地方、昭和十四年に九州地方を視察した折の保育料をぬき書きしてみましょう。

（官）奈良二円（市）大阪三円（市）神戸三円（市）御影一、五円（県）明石一円（私）宇治山田一円（公）小倉一円（公）熊本四、七円（私）福岡一、五円（私）佐賀一円

大正末期から昭和にかけて官公庁の視学の私立幼稚園に対する眼は冷たかったように思う。その一例として幼稚園は何をしておるだろうという声が監督官の中からもれ、地域社会からも子守同様にみられ託児所と間違えられる一面もあってこのみじめな存在を如何にして好転させるべきかに苦心しました。

昭和十四年九月には、視学委員視察指導研究会が設置され徐々に軌道に乗せられてきたが、公立は、昔も今もお役所の教育系列にあって幅広い場を展開しつつあるのに比べ、私幼に対しての眼は真に冷たい、机上の管理は甚だきびしいが教育内容の指導には全く権限外といった組立てらしい。

現在では私幼の数は百四十園の大世帯となり、ますます私学振興の重要性がとなえられる折柄私幼の展開に役立つよう、その筋に対し単なる管理のほかに直接教育内容を充実し得る現場指導その他適切な機構を打ち立てていただけるよう望んで止みません。

（山口県　亀山幼稚園）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

笠井久子

すめらみくにの　くにたみは
いかなることは　つくすべき
きみとおやとに　つくすべし

昭和二年の頃です。私は、はかまに下駄のいでたちで、苦爪惠三郎先生の「保育法講義」をたずさえ、十三円の初任給で、この園に赴任してきました。当時の園児たちが、朝会のとき、皇室ご一家のお写真を前にして、おごそかに歌っていたのがこの歌でした。良家の子弟は人力車で登園、それを門前で、ていねいな挨拶をかわして受け入れます。九時半か十時頃に小使さんが、鐘をたたいて歩き回ると、全員を講堂に集めます。コトリともいわせないようにさせると、さきの朝会が始まるのです。

園長先生は師範出の方、御主人は陸軍大佐だったせいでしょうか、皇国民錬成を主軸にした方針で、小学校に近い指導方法がとられていたようでした。園児は百余名、四クラスで、一年保育三十四、五名に、あとは二年保育の年長、年少と三年保育が若干まじっておりました。

当園の設立が計画されたのは、遠く明治二十六年のことで、女高師出身の某女史によって主唱されたということですが、機運みのらず、その十数年後に、市婦人協会が、日露戦争戦捷記念事業として開設されたものです。

管理は久留米教育支会に委嘱し、約した条件の中には、一、設備載百五拾円ナイシ参百円、並ビニ経常費一年百五拾円以内負担スルコト、一、家屋並ビニ運動場ハ市ヨリ無賃ニテ借入タキコト、一、日露戦争ニ関スル貧困ナル戦病死者ノ遺孤、並ビニ廃疾者ノ家族ハ、無月謝ニテ入園セシムルコト、などがあって、当時としては斬新な規約だったようです。

さて、朝会のあとには園長先生の訓示があり、各クラスに入って、〇〇の時間、という形で保育が始まることになります。保育

費は二円五拾銭でした。

手技の時間には、折紙、はりえ、ぬりえ、写生のほか、モンテッソリー式の貝ならべ、はめこみや、フレーベル恩物の積木や縫取りをし、全て指示通り、お手本通りにしないものは、きびしくいましめました。第六恩物の指導はざっとこんなものでした。

〃ハコノフチヲ、スコシ、コチラヘヒイテ、ハコヲウラガエシマス――ハコノフタヲ、シズカニトッテクダサイ――トッタラ、ツクエノムコウガワヘキチントオキマス――サア、ミナサンノダイスキナ、キシャヲツクリマショウ――ハジメニ、ナガシカクヲトッテクダサイ〃

〃教育者の働きは、一つの助長行為であって、正しい方向に自発自展せんとするものに援助を与えることである〃という言葉も、ここでは素通りしていきました。

律動遊戯は、土川五郎、渡辺先生の講習を受けた中から多く取上げられ、表情遊戯では、水鉄砲、鳩ポッポ、牛若丸、大江山、さらには、荒城の月、埴生の宿など随分高度なものを教えておりました。あとの二つがどうして選ばれていたのか、今でも不思議ですが、おそらくは父兄の要望にこたえてのことだったのでしょう。律動の中には今も残る、かいぐり、おじき、エースオブダイヤモンド、ブレッキングなどがありました。打楽器がなかったせいか、子どもたちはよく共同の積木をたたいておりました。時流のムードにのって、よく歌った歌に次のようなものがあります。

ボクラハ　ニホンダンジナリ
セカイデ　ツヨイハ　ボクラナリ
イクセンソウノ　グンカンモ
イクヒャクマンノ　タイグンモ
スコシモ　オソレルコトハナイ
ボクラノ　モッテル　テッポウニ
ヤマトダマシイ　タマコメテ
イチドニ　ズドント　ウッテヤル　ドーン！

この最後のドーン！が一番活気に満ちていました。もう理論と実践のちがいに消沈してはいられません。やれることだけをやれるだけやることでした。それで毎年一円ずつ昇給していきました。

談話の時間の中では、童話はたいていが日本昔ばなしで、ときには、同僚と場面を想定して作った掛図式の絵を、めくりながら話をしたこともありました。父兄の一人でドイツの人が、週に一度、三〇分ばかり英語の単語を教えにみえていました。十四、五分もすると、子どもたちがこっくりこっくりするので、私は先生の後方に立ち、手まねロまねで静止の合図をしていたことも、こっけいなことでした。

粘土の時間の前日には、往復三時間の道程を山奥までバケツを

手にして、採ってきたものです。戸外の水道の近くに積み上げ、すきなようにさせました。子どもたちが無心に遊んで、ひらひらした服をよごすので、そのよごれを鄭重にとってやるのがつらくはありましたけれど、筑後川や野の花を摘みにたびたびいき、自然の中に放たれて、子どもも教師も、伸びやかに過したひとときとあわせて、救われた思いがしたのでした。

保育が終ると、一組に四、五人は控室で待っているねえやさんたちに掃除をお願いし、私共は日誌や会計をつけます。日誌は、園長先生が〝鉛筆でよい〟とおっしゃるのを、いつも毛筆をつかって記録をとりながら、ついでに書の練習もしていました。黒板の面いっぱいをつかって、明日の保育に役立ちそうな絵を毎日のように描きました。この絵を楽しみにして、早く登園するようになった子どももいましたので、一層気をよくして夕暮れをあわてず描いたものです。

同僚と相談した上、園長先生に進言したことがあります。附添いのいる子どもたちが先生の指示通りできないと、すぐさま助けを求めに控室へとんでいくので、附添いの入室をことわることでした。そのかわり掃除が残りました。ピアノの資金集めに、お遊戯会を劇場でやり、マイクがないので蛮声をはり上げて司会にあたったこともあります。ピアノは市内の小学校には、二校しかない頃で、一枚五十銭の券で大成功をおさめました。それからは、律動遊戯の伝達講習などに、コンビでよくでかけました。熊本の五福幼稚園での研究会で、倉橋先生のお話を伺っていたのもその頃です。

昭和十四、五年でしたか、すでに園からは遠ざかっていたある日、小学校の運動会に出場するという、当園児の遊戯をみにいったことがあります。久留米絣のつつそでに、縞のはかま、白い鉢巻の園児たちが剣舞をして満場の喝采をあびたとき、私は戦時局の進展をまのあたりにみるおもいで、心底から憂いたことでしたが、やがて戦災がすべてを灰になし、恩物やぬりえともいとまを告げてからは、ようやく迷路をでたおもいでした。市からの助成金もこれを機にとだえました。

平和な時代——自由主義に根ざした新しい教育の場が広がってきました。過去が残したコチンとしたつめ込みの世界からは遠のき、子どもたちを理解して、充実した教育ができる時がきてもう二十年になります。

いすとりの遊びをして、最後までのこった子を胴あげし、喜びを分ちあう子どもたち、卒園期には〝○○ちゃん、もうすぐいちねんせいおめでとう〟とかいた紙をそえて、手作りの花をクラスの一人一人におくる子どもたちにも育ってはきましたけれど。

なごやかさが全てのもの——教師にも両親にも、全ての人々にいきわたり、みだされない子どもたちの世界が、美しい音をたてたなるように——その日のために、はげみたいものです。

（福岡県　久留米幼稚園）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

高森　豊

明治三十三年熊本市に生まれた私は五才で創立二十九年の五福幼稚園に入園した。珍しいバイオリンをかなでられる先生を真中にして「ひーらいた、ひーらいた」の遊戯をしていて、あの遊戯室で遊んだこと、れんげの花、つるぽっぽなど折ったり、組織などしたことが、今日の日も思い出されて、時々夢を追うことがある。そしてその先生の顔はほんとになつかしく思い出される。部屋は五福小学校内の一隅であったようである。肩からつるして行く、うるしぬりの丸形の弁とうの上には盃形の湯呑みがふせられて、そのきれいな模様を喜んで、昼食をしていた様子、全く夢みたいに私の胸を去来する。

そしてそれから三十二年の歳月を過ぎて、五福幼稚園に勤務することになった。人の世の縁の糸の強いつながりに心うたれた。

なつかしくてたまらぬ中に、全く私はろうばいしてしまった。幼児を向うにしてのことは考えたこともなし、二、三ヵ月は書籍戸棚のとりこになって、関連あると思うものはみなあさり読みをした。しかしなかなかによりどころははっきりとつかめぬし、系統づけられない、そして私は苦しんだ。ただ「教育の道である」と思い至って、一息ついた。

でも昭和八年は昔とはいいながら、大正十五年の幼稚園令が出されて、それが八年の間に浸みわたり、幼稚園にも相当の方向づけがなされていたように思われる。「幼稚園は幼児を保育しその心身を健全に発達せしめ、善良なる性情を涵養し、家庭教育を補うを以って目的とす」と規定され、その保育内容として「幼稚園の保育項目は、遊戯・唱歌・観察・談話・手技等とす」と定めていることがそれである。

時の熊本県にも熊本市公立幼稚園が六園・私立が三園・郡部に町村立が四園・私立が三園県下に十六園あったようであるが連けいとてもなく、ただ熊本市の市立はお互いに手をつなぎ、研究会をしていた。保育の在り方、五項目それぞれの理解を深めたり、また各園は交替して、保育の研究会などを開催していた。互に気

脈相通じて、共に保育の向上に邁進したものである。

時の幼稚園はフレーベルの流れをくみ、一面米国の保育も混じて、時には恩物は硝子張りの教具入れの中に飾られ、其の他は物置きにしまわれた様相であった。

一部の教師は「幼児の実態を捉えて、そこを出発点として保育をする」といって、入念に幼児を観察し、メモして、一生けん命に努力していた人もあった。

しかし時の保育界は殆ど社会の行事を中心とした細目（今日のカリキュラム）が編成され、幼児の心身の成長発達、心情の陶冶をねらって愛育されていたのが実状である。ただ、何となく不安であり、確信なく、もだえたのは真実である。

雑草、保育真諦、誘導保育、などの倉橋惣三先生の著書、これは皆私の魂をゆさぶり、私の前途に光を与えて頂いたものであった。もとより深い先生の書物の真意に徹することは不可能であり、不可解な処もたくさんあった。先生のもとに馳せ参じ、あれもききたい、ただしたい、とあせったが時代はそんな時を与えられなかった。幸い私の身辺にもお茶の水出の人がいて、常に論議を交わし、私が常に啓蒙して貰えたのは、せめてもの幸いであったと感謝している。

こんな書物に導かれ、勇敢にも市内全園に、保育の実際をやってのけた。まさに飛やくのはなはだしいことであり、皆をして予想天外の感をいだかせたと今更のように思い起こすことである。

幼児健康増進の為にと園外保育の実施と、幼稚園給食を母姉の了解喜びの中に発足した。父兄の協力のもと給食室を設備し、栄養食の勉強、時の大家、佐伯栄養博士の講義をうけ今日にいう完全給食を実施した。教師一同の強い協力のもとに、十年の歳月をやり直した。この間に全市立幼稚園もこれに踏み切り、家庭にも、子どもたちにも楽しまれた。「幼稚園のライスカレーをつくってよ」と頼まれるからと教えを乞うものも出てきてうれしかった。

お節句のお団子作り、楽しい誕生会、母子席を並べての会食、遠足の楽しいお弁当作りなど、ねらう偏食矯正、身体発達などはもとよりながら、親しみながら、同じ食事に喜ぶ心情などまことにうれしい月日であった。

また一方、自立の精神を発達させるため、道中の送迎は、さしひかえて欲しいと要望したり、何キロの道等、元気で歩いた園外保育、野に行き、山に登り、額に汗しての往復、まことに体力増進、真に安全な時期であった。その頃の幼児は恵まれた時であったと、心からよろこびにたえない次第である。

今頃のようにもとより文化は進まず、種々の物にも正しく劣ってはいたが、心の豊かさは、ほんとに今日とはかわり、美しい、親しい心の、ゆとりある生活を営んできた。

子どもと子ども、そして、子どもと教師、心のふれ合いは深かった。心の通いは近かった。

まことに今日の教育は研究されている。

向上している。幼児も成長している。
しかし幼児の身辺は必ずしも、幸いではない。
マスコミは、よしにあしに迫っている。
車輪はつねに生命をねらっているかとさえ、思われる。
フレーベルがいたあのガーデンで、幼児自らの神秘を育み、母親とともに、幼児の導きに、正しさを得るなら、この上もない教育であろう。
九十年を経た今日、幼児教育の様相も、社会の情勢、この道の研究により、まことに大きな進歩をとげたと思う。そして大衆化されつつある幼稚園、近代化されて行かねばならぬ親の協力、フレーベル教育の近代化など、私たちは、しんけんに考え実践して、今後の道を打たねばならぬと思う。（熊本県　ゆたか幼稚園）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

草野　京子

大正三年四月、弟が附属幼稚園に、はいると同時に、私が専攻科三年を終て「幼稚園の先生になる道は？」と倉橋先生におたずねしたところ、「この学校の中に、そういうコースがある」と指示していただいた。そして早速手続きをしたのが「保育実習科」であった。其年の入学者は十一名、病気の為翌年まで残られたSさん以外は、その年の七月十日「所定の学科を履習せり」ということで、たちまち「幼稚園」という現場に送り出されてしまい、全く文字通り無我夢中であった。
当時のお茶の水幼稚園々舎は、今の文京区、本郷通りに面した門をはいって右、東に向いた玄関入口には数段の石段があり、登ると、東西に長い廊下、つきあたりに、T字形に広い遊ぎ室、左側（南）は保育室、入口に近いのから三の組、二の組、一の組、右側は、入口から職員室、別棟の二部保育室に行く廊下、手洗、洗面所、別棟の小使室から、木造の二部の保育室は天井はひくいが、明るく陽あたりが良かった。一部の方は、「一の組」五才児二五名ぐらい、「二の組」四才児二五名ぐらい、「三の組」三才児一八名ぐらいで、二部は年令でわけず、五才児も三才児も兄弟のように一つ机をかこみ、椅子の高さに差がついていたように思

う。

一部の年長組の机は長方形で椅子も普通の形であったが、三才児の三の組のは、組み合わせると円形になり、はなせば扇型の四個になる。色も明るいし、その頃としては最新の物であったらしい。倉橋先生の御考案ときいた。その頃物置に、たてよこに線を描いた机がつんであった。「何かしら」と気にもとめないでいたが、後で思えば、フレーベルの恩物を、フレーベル式に使った頃の物であったらしい。

その頃の幼児たちは果物かごにバラバラにもり上っている木片（積木）を自由に思い思いに積みあげたり、長い線路を協力してつなぎ、いつの代にも男の子の興味の中心になる汽車や電車（積木の）を走らせていた。

保育時間は、九時はじめ、一時半頃終り、それでも、受持の先生は八時前に毎朝みえていた。学生の私たちはその前に楽器を練習しようとして校門のあくのを待ったこともあった。

先生方は保育の予定と実際を週録というのに記録された。それには、整容、会集、談話（おはなし）、観察、遊ぎ、唱歌、摺紙（おりがみ）、豆細工、粘土などあって、整容、会集は毎朝、その他は曜日によってさまざま、談話は庭の木影でもした。整容は保育室で毎朝登園した幼児が「先生おはようございます」と挨拶をすると、家から着て来たエプロンを脱いで、バスケット（お弁当を入れる）に入れて来たエプロンと取りかえる。帰る時はこの反対。形も色もそれぞれだから間違うことはない。この時年長組はボタンのはめ、はずしを友だち同志でする。当時モンテッソリー女史の特殊な教具による感覚練習が我国でも研究されていたが、それを幼児の生活の中で実行させる為と私たちは教えられた。その時小さい手の指先にも注意して、あんまり伸びてる爪はきり、受持の先生は手の熱いことにも留意しておられた。鼻汁をかんだり、ゆるんでいる靴のひもをしめたり。次には、会集、一部の幼児全部、遊戯室で、だ円形にならび当番の先生の司会で、おはようの歌、桃太郎さんのお供、おじぎ遊びなどをする。終はスキップでのびのびと広い室をまわって各組室に分れる。

運動場は園舎の南側で広く、木立は中央には無かった。西の方に小さい丘（おやまと呼んだ）がありその下に、たたきの池があって金魚も亀もいた。この池の水換えを、よくI先生が、たすきがけで裾をからげてしておられた姿を思い出す。入園当初は、どこの園でも、いつの時代でも泣く子が多い。私の弟も、ごたぶんにもれず大声で泣きつづけたので、その頃の主事安井哲子先生が、手をひいて池や築山のあたりを歩いておられたことを思い出す。ブランコ以外には運動具は無く、広々とした草地は幼児の足で存分走りまわれるし、特に夏休み後は雑草が子どもの背丈より高くしげって、バッタはとぶし、幼児たちにとっては、この上ない楽しい庭であったらしい。学生としての私は知らないが幼い弟の語るので想像された。

（国立音大附属幼稚園）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

林　刧子

本年は日本に幼稚園が誕生して、九十周年になります。私の幼稚園は、明治四十三年七月一日に開園して五十六回目の卒園式をいたしました。私の幼稚園時代明治三十一年頃の記憶に残っているものも添えて、古いおもいでを綴ってみます。ほんとうに話のような事実があるのです。そんな世の中であったのかと、御想像下さいませ。私の幼稚園時代は申すまでもなく、私の幼稚園の創立当時も、幼稚園にたいしての、理解も認識も薄かったので、幼稚園の数も少なく、入園者もあまり多くなかったので、一組の人数も適当でした。

園舎はもちろん木造ですが、障子が紙張りでしたから、園児が破ったり、紙の色が変色したり、障子の骨が折れたりすれば、その修理に余分な時間や労力を費やしました。硝子障子になったのは、大正年代に入ってからと思っています。保育室と申しましても、小学校の教室と同じようで、机も小学校の型で、腰掛も二人がけで、ただ高さを加減したにすぎませんでした。

私の幼稚園時代の先生と呼ばれた人の服装は、和服で帯を結んで、髪の形は「丸まげ」、「いちょうがえし」の日本髪で、履物は「草履」か「こま下駄」を多く用いました。お掃除など、はたらく時は、たすきをかけ、前かけがけでした。園児は男は筒袖、女は元禄袖のきものに「へこ帯」をしめ、エプロンをかけて登園しました。私が初めて勤務した大正三年頃は、先生の服装はやはり和服でしたが、帯はしめなくなって、袴になりました。長い袖の時は「たもとの先」を袴の紐のあたりにさしこんでしました。袴は終戦前まで、つづいていました。髪は束髪になりましたが、その束髪も次々といろいろな流行型が変ってきました。写真を見ると実に笑の種です。

大正三年頃からボツボツ洋服が園児の中にあらわれてきました。登園の状況はといえば、みんな歩いて行きました。乗物は人力車が多く、あとは自転車ぐらいでしたから、現代のような交通事故の心配もありませんでした。大雨でも降れば人力車で送り迎えをしましたけれども、それも極く稀でした。人力車につづいて国民車があらわれ、しばらくの間は人力車と国民車が交通機関として便利を与えていました。雨の日には傘をさしてきて氏名は傘の内側の紙のところか柄に記しましたが、傘をひらく時、よく注意しないと、つっついて破るので、苦労の種でした。洋傘は大正年代へ入ってから、だんだん使用するようになったように覚えております。

保育時間は午前九時から午後二時頃まででした。保育の実際は時間割的で、先生のたてた計画通りに行なわれ、時間でくぎりをつけて行くのでした。集合の時、室に入る時は、明治の末期あたりには「かね」をならして合図をしましたが、大正のはじめ頃には、「お集まり」とか「おへやへお入り」といって、先生たちが手をたたいて、合図をするようになりました。

次に保育の実際はどのようであったか、どのように変ってきたか、述べてみます。

「オルガン」はなかなか買えませんでした。明治四十三年に私の幼稚園が創立した当時でも、遊戯室に一台あって、遊戯をする時には、その組がオルガンの伴奏で、うたったり、おどったりして、他の組では、先生がうたって、きかせて、伝授するのでした。

ですから先生たちは、調子をはずしては大変だと、一生懸命に、歌や遊戯の練習をしたものでした。大正の中ごろから漸次オルガンを各保育室にも備えるようになってきて、保育上に活気をもってきました。

幼稚園でうたう歌といえば古くから「桃太郎」「金太郎」「兎と亀」「蝶々蝶々」「ひらいた、ひらいた」「椿やつばき」「朝の歌」「カラスがカアカアないている」など多く伝えられ用いられてきましたが、大正の中頃すぎのように思っておりますが、新しい童謡がとりいれられてきました。

遊戯は模倣遊戯といって、うたの文句を形にあらわしたようなその踊りを、先生のやるのを真似して、みんなそろってやるのでした。この模倣遊戯は随分ながくつづいてきましたが、しばらくして表情遊戯ととなえるようになり、また歌をうたわないで、表情でする律動遊戯といわれた遊戯もとり入れられて、終戦までつづきました。しかし、新憲法公布につれて、幼稚園教育内容が文部省の指導によって一新され、音楽リズムとなり現在に至りました。

今は絵画製作といいますが、昔は「お細工物」、「おえかき」、「画き方」とか申しました。「豆細工」、「紙だたみ」、「貼紙」、「剪紙」などをして、一週間に二回位お土産にもたせてかえしたものでした。糊は、現在のような糊はありませんでしたから、「うどん粉」や「メリケン粉」をねばるようによく煮て、小皿に分けて与えました。紙面が許されるならば、どのようなものを、どのようにしてつくらせたか述べてみたいのです。

けれども残念ながらお許しいただきます。ただ一言だけ申しますならば、遊戯と同じように、ここにも模倣による指導が行なわれていたことです。先生が示したようにつくらせたのです。それば かりでなく、先生のお手本と違えば、たたみ直させたり、貼り直させたり、なお丁寧にあとで手を加えたりしました。今おもえば、こども自身の力でするということを尊重しなかったのだと思います。

勤務は午前八時までに出勤し、午後五時から六時頃まで熱心につとめました。忠孝一途の時代でしたから、職場は戦場と一緒だといわれ、家庭を犠牲にしてもというきびしさと真面目さでした。かえりがおそくなっても少しも文句などいわず、強い責任感からむしろ、働くことを誇りとしていました。大正のはじめ頃は、まだランプをつかって電燈がついていることは珍しかったので、かえりが夕方になった時は提灯をつけてかえり、幼稚園ではランプをつけて残務をとりました。

また忘れられないことは、一月一日、紀元節、天長節などいろいろの行事上で、式をあげる時必ず「勅語」を奉読したのですが、この勅語を奉読する時の緊張さでした。勿論そのはじめからおわりまでの態度は厳粛なものでした。これはみなさんもご存じのことと思いますが終戦と共に姿を消しました。終戦まででも、古い伝統をうけついで、その時代時代の動きにつれて、いろいろ変遷したことを記せばきりがありません。フレーベル主義とか、モンテッソリー主義とかまたは一斉保育、自由保育など一日の流れにおいてさまざまの保育方法が行なわれました。

その時代時代の教育思潮による教育の傾向があったのです。現代から考えれば、随分おくれていると思われますが、終戦後新しい憲法が公布され、教育基本法による学校教育法の中に一連の姿となり文部省から幼稚園教育要領や各領域の指導書が発行され、指導者講座も開かれて、全国歩調をそろえて就学前の教育へ進んでいますが、まだ、古い昔の伝統の殻が、ぬげない点があることを深く反省するとき、うなずけると思います。

古い昔をふりかえってみて、実に今昔の感に胸せまるものがあ

ります。今の世代に欠けているもの、古い年代の歴史の中にも尊いもの、学ぶべきものがあります。一概に古いふるいとはいえないと思います。お互に、それぞれの園の経営管理に力を注ぎ、自己の利慾をすてて、明るく楽しく仕事に打込んで、幼児教育の使命達成に精進して行かなければと、つくづく思わせられます。

御参考までに私の幼稚園の保育料と入園料が変更されてきた実状を記載しておきました。

年号	年	保育料	入園料
明治	四三	六〇銭	五〇銭
大正	三	七〇銭	六〇銭
大正	七	八〇銭	六〇銭
大正	八	一円〇〇銭	六〇銭
大正	九	一円三〇銭	一円〇〇銭
大正	一〇	一円五〇銭	一円〇〇銭
大正	一四	一円八〇銭	一円〇〇銭
昭和	一七	二円五〇銭	一円〇〇銭
昭和	二一	八〇〇円	五〇〇円
昭和	二一	一五〇〇円	／
昭和	二二	三〇〇〇円	一〇〇〇円
昭和	二三	八〇〇〇円	三〇〇〇円
昭和	二三	一五〇〇〇円	一〇〇〇円
昭和	二五	三〇〇〇〇円	二〇〇〇〇円
昭和	二七	五〇〇〇〇円	三〇〇〇〇円
昭和	二九	六〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三一	七〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三二	八〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三三	八〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三四	八〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三六	一、〇〇〇〇円	五〇〇〇〇円
昭和	三七	一、三〇〇〇〇円	一、〇〇〇〇〇円
昭和	三八	一、六〇〇〇〇円	一、〇〇〇〇〇円
昭和	三九	一、八〇〇〇〇円	一、〇〇〇〇〇円
昭和	四〇	二、〇〇〇〇〇円	一、〇〇〇〇〇円
昭和	四一	二、五〇〇〇〇円	二、〇〇〇〇〇円

（静岡県　学校法人桜花幼稚園）

幼稚園創立90周年の年にあたって

昔の幼稚園の想い出

大塚喜一

今日僕に大いなる精神的生命を与えつつある「幼稚園に於けるおはなし」は、顧れば、大正七年三月に大阪府立堺中学校（現在、三国丘高等学校）卒業直後に、若き僕の魂に幼稚園児の純情を感得したに始まる。わが人生のこの初発心は、母校の「三丘同窓会」発行の『三丘会報』第六号（昭和三十七年五月六日発行）に『青春の歓喜』と題して載せられた左の文中に、人の生涯を一貫する道の端芽（はじめ）となる訳（わけ）を次のように披瀝した。

『大正七年三月母校を卒業して同年九月岡山の第六高等学校に入学するまでの間に、わが幼き日に保育を受けた堺第一幼稚園を訪問し園児たちの遊び仲間に迎え入れられ、一心に作る砂饅頭を受けて、自他物心内外が唯一全体の統一活動に収め容れられる人間生活の雛型として、わが若き日の喜悦の源泉となった。

この喜悦が、岡山の幼稚園児との間にも、故郷に於けると同じように、同一の童心に活かされて生れ出づる新生として感得せられたのである。斯くして、天真の信として発露する純情は、本来我もなく、人もなく、一切を本の唯一に帰着させた極、面目を一新させられるが故に、教育者も被教育者と共に、大人も子どもと共に、ここに平等一味に融和して共通生命の歓喜を交感させる同志同行たらしめる。

「純とはそれのみ、それ以外になし」となり切る道に徹する人生の端芽が、基本教育の時期なる幼児期に、人間一生の個性の芽生え初める最初に基本を立つべきで、この正しいスタートによって、自己と世界との合一した全人格像が、青年期の「思索」「感激」の実を結ぶのである。（西田幾多郎著「善の研究」第三篇第十章岩波文庫青四十、161頁「深遠なる統一力」の覚得）

岡山の六高に入学したのが大正七年九月であったが、その三年間の在学期間が短縮されて大正十年の三月に第二部理科乙類を卒業せねばならなくなった。当時数学の授業を担当せられた秋山先生は、筆記に学生の力を分散せしめぬように、「見て居給え、そして、わかったら書き給え」と、専一に真理を学得する道に指

向せしめて、この学年短縮の難関を突破せよと戒しめられた。斯くして、大正十年三月に卒業後、京都帝国大学理学部数学科に入学し、三ヵ年を経て大正十三年三月卒業、引続き同四月から文学部哲学科に入学、教育学を専攻した。其の通学中、南禅寺真乗院の宿所から東山沿いに疏水べりを歩くこと幾度、往く水に心を洗われた想出は、昔の三高の校舎で受験後清い流れに疲れをいやされた当初の感興に通うものがあり、臼井喜之介師著「カメラと詩歌、京都」124・125頁に「哲学の小径と言いならした道」と紹介せられたこの風光は、自然に親しみ小我を脱して身心一に、天地人の和合する宮居が「三丘」に純熟する処、「私意一関を蹈ゆる」道（西晋一郎著「東洋倫理」136頁）を具えさせ得るのだ。

東山　飽かぬ眺めは　色渝へぬ
　　松ありてこそ　とこしなへなれ

（三七、三、二七、後一部補）』

幼児たちを力一杯におもしろく遊ばせる幼稚園の真の風光は、砂場遊びに最も鮮やかに見られる。昭和四年四月四日に東京の成城学園幼稚園年少児十三名の「保父」に就任した小生の保育日記の中に、その秋のある日の光景を昭和五年末の回顧記に次のように述べている。

『砂場で遊んでいる一群の幼児たち、山を造る者、池を掘る者、トンネルをうがつ者、水を運ぶ者。小さい手のとどく限りの深い穴を掘っているので、おかっぱさんの髪の毛が垂れて砂がついているのにも気付いていないらしい。小さいバケツに一ぱいに水を入れて重そうに持ってくる。水が少しこぼれて足にかかった事位に頓着せず、友の作った池の中へ流し込むや又嬉々として噴水の方へ水汲みに走る。お帰りの時間になったので、僕は保育室で幼児の人数だけのオヤツをお皿に入れたが一人も入ってこない。が、こうしたみっしり充実した遊びの時が五分―七分と経った。「オヤツですよ！」と窓から呼んだが、ちょうどその時窓の下をかけていた元気な男児が「もう少し待って」と答えただけで、他の児たちは僕の呼声がきこえなかったのだろうと思われる位、遊びそのものに全精力を傾注している。彼らは各自自己の当面の生活に没頭しつつ、しかも其間に働く或る相互作用によって、遊びのおもしろさ（熱と力）が充実し進展して行くもののように思われる。此の相互生活たるや、小学上級生の如く意識的計画的でなく、むしろ自然の環境の中に成立し純熟した半意識的な色合を多分に具えているところに、純真な生一本な幼児の生活としての尊さがある。僕はこうした情景に一種の畏敬の念をさえ起さずにはいられなかった。幼児たちは彼等の背後に働いている或る目に見えざる偉大なる一者のみちびくままに忠実に孜々営々として活動しているのであって、彼等の真剣なる態度――瞳の輝き、頬の色は、この偉大なる者の如実の顕現である。フレーベルの発見した『神性』もまた是に外ならない。（「幼児の教育」昭和六年二月十五日

寄稿「保育ということ（ノートの中から）」抜粋）

（註、本稿を書き始めた五月十八日午後七時半からのＮＨＫテレビ「生活の知恵」に「土礼賛」と題して、東京都渋谷区本町小学校五年生児童たちが、神奈川県三浦半島で、ジャガ芋掘りをして土に親しむ楽しさを中継録画で再認識させていた）

「砂場は幼児の楽園で、幼稚園第一の設備である」とは、京都大学教育学の恩師小西重直先生が、我等保育の当事者に垂示された意味深いお言葉である。それについて、先生から次のように解説して頂いた。

「自分が独逸に留学中に、童児の砂に遊ぶ様に感ぜしめられたに起因する言であり、その光景を撮影したいために、当時は得難かった写真機を、始めて購入した。」と。

大阪の幼稚園界の古老であられた江戸堀幼稚園長膳真規子先生には、砂場を土曜日の午後全職員がたすきがけで、きれいに掃除すると承ったことがある。僕は、砂場には素手で素足で入って、砂饅頭の幼児の贈り物を、幼児たちの遊びの仲間入りして一緒に作る遊戯三昧境を味到せられるようにおすすめしている。

昭和十一年十二月十一日、大阪久宝幼稚園で、一人黙々と作る年少女児の手から砂饅頭を受けた際に、他の児のように盛んに話しかけたり早くたくさん作りはしないが、ていねいに作るので円くきれいに、その子の心を形に表わしたようにできるのを、物我一体の純粋経験として感得したことは、「お月様いくつ」の幼児噺を京都の豊園幼稚園で自由形態でこどもたちの方から聴き入る中に語り得た時の幼児たちの瞳は常住に小生を見つめている子ども心と感得せられたのと同様の「永遠性」がある。畏友塚田喜太郎兄が昭和十三年九月一日に大阪南の深日の海岸に創設せられた南海幼稚園は、

一、大自然の恩恵豊かなること

二、年少児の保育を重んずること

の二大特色を顕わす適格な楽園であることを、機会ある毎に訪問し「おはなし」を続けて来た経過を記して、御紹介したい。同兄との「おはなしの道に我が友を得て」と題した「幼児の教育」三十七の十二に寄稿の『談話法』は、開園の次の日に語った「太郎さんのお馬」のリズミカルな応答に、「話者の耳と眼とを働かせよ」との兄の態度を修得させる交感の場を得た。遊びに於ても同様で、七十五坪の仮園舎で汽車ごっこをした時、おくれる子や列から離れる子をかまって大道に精進する力がゆるむと、混乱は益々増すが、目ざす方に全速力で駆け出せば、その盛んな活動の流れに、前後の争い乱れ等一切が洗い去られてグングン追いついて来る。開園早々に、大暴風雨中、親に背負われて二九名の出席があったと、九月五日付の報告のハガキを、昭和四十年五月十五日他界せられた兄の告別式、追憶の集い等に御紹介して、斯の如き純なる保育の道を共に進む同志同行の友垣を拡充して行きたいと思う。

（京都平安女学院短期大学）

リズムあそび

―夏のあそびを中心として―

森山美代子

本園においては幼児のからだづくりについて昨年より研究し実践をつづけているわけですが、幼児期にからだを自由自在につかい、自分の気持をあらわすことができる基礎を養うことは大切なことである。幼児期に運動神経をのばした子は生涯がん強なからだになり、反対にそれから遠ざかったり、禁じられた子は不器用な子どもになってしまうおそれがあるわけです。子どもは内臓や筋力こそ弱いが、神経系統の面はまことにあなどりがたいものがあることを、充分知っていなければならない。子どもが神経を主体にしてやるような運動、（タイミング、バランス、リズム中心になったもの、例えばブランコ、ボールあそび、リズムあそび）などを好むのは当然で、園においてもこの方面のトレーニングは効果的であると考える。

組の概況

五才児（二年保育年長・一年保育混合組）

一年保育児はほとんどの子どもが保育園生活を一年ないし二年経験してきているため、社会生活においてのいろいろな抵抗も少なく、経験の一つ一つをその子なりに取組んで、自分で処理し、精一ぱい努力してきている。しかし子どものほとんどが、長子、末子、一人子のため家庭においては期待をかけられ、過保護に育てられている。そのためすべての動作が緩慢で、何事も引っ込み勝ちの傾向にある。

思いつきのきっかけ

子どもは暑さには弱く、しかも疲れ易いというように考えられ、ともすれば過保護になりやすい。もちろん暑さや疲労などには充分配慮しながらも、暑さの中で精一ぱいあそばせるということは大事なことである。そこで今回は夏の楽しい生活経験を、リズムあそびをとおして生き生きと表現されるよう指導していきたいと思う。

ねらい

1　暑さの中で精一ぱいあそぶ。

2　リズムあそびをとおしてリズム感・敏捷性を養う。

3　誰とでも仲よくあそぶ。

用意するもの

とび箱・マット・タンブリン・レコード

導　入

「先生、ぼくね、おとうさんとさかなつりにいったよ」

「ぼくは、まさおさんと川へいってメダカとりをしたよ」

「わたしはおうちの人と大社の浜へいったよ。おにいちゃん、じょうずにおよいだ」

「ぼくもおとうちゃんと海へいって、ボートにのせてもらったよ」

「わたしね、おかあちゃんとおべんとうをもって丸子山へあがったよ」

など、わたしもぼくもと得意げに話してくれる。日曜日の生活経験の発表の中からである。子どもたちの輝くまなざし、それぞれに夏のあそびを経験したり、友だちの話合い、その他テレビなどで興味をもっている。そこで「今日は先生といっしょに海へいったり、山へのぼったりしてあそびましょう」と話し、いろいろなあそびを思い出し、積極的な自由表現を元気一ぱいして楽しませる。

展　開

〔舟こぎ〕（71頁楽譜参照）

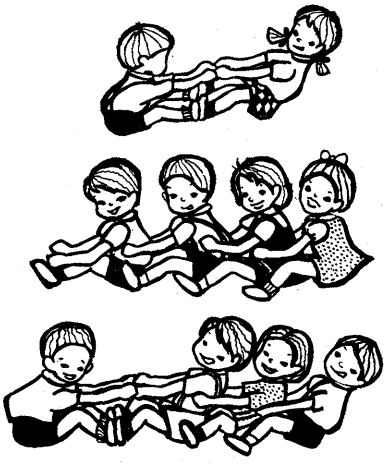
「おともだちと二人で舟をこいでみましょう」というと、二人組になり舟をこぐ。むき合っているもの、前後になってこぐものなどいろいろの表現をしている。前後に力を入れて、リズムにのっていっしょうけんめいこがせるようにする。次第に二組がいっしょになって人数をふやし協同してこぐようにする。一番前の子

どもがかじをとり、残りの三人が力を合わせてこいでいるところ、ボートレースのようにならんでいるところなどそれぞれに工夫してやっている。かじをとるものを交替してやらせたり、時には早くこいだり、おそくこいだり、また初めは早くそして次第におそくしたり、この反対に行なわせたりして、変化をあたえると共にみんなと気持をあわせて動作させるよう指導する。

〔およぎ〕（71頁楽譜参照）

「みんなで海へ入っておよいでみましょう」というと自由に手足を動かし床の海をおよぎまわる。リズムにのっておよぐもの、曲のアクセントも平気でおよぐものなどいるが、すっかり調子に

〔舟こぎ〕



のってまるで本物の海へ行ったような雰囲気である。

この時とび箱をところどころにおいておき、飛び込み台からとべるように用意しておく。足をバタバタさせるとき、友だちの頭をけるようなことがないよう、およぐ方向などの配慮も必要である。できれば三拍子にのってリズミカルにおよげるよう徐々に指導したい。

〔魚つり〕

「こんどは静かに魚つりをしましょう」と話すと、「ぼく魚になるよ」「わたしも魚になるよ」「ぼく魚つるよ」とそれぞれに魚をつるものと、魚になるものとに分れて表現する。

やさしい魚もいるし、元気のよい魚はピンピンはねながら泳ぎまわっている。

「魚をつる人はしずかにしないと魚がにげてしまいますよ」というと「そうだよ、かずちゃんしずかにせーや」とそばから注意をあたえるものもいる。

高いところからつり竿をなげてみたり、魚のたくさん泳いでいるところへ行ってつったり、いろいろな表現が目につく。また魚は上手なつり手にさそわれて次第に接近し、つられていくところもある。「あゝ、けいじくんが魚つった」と思わず歓声があがる。

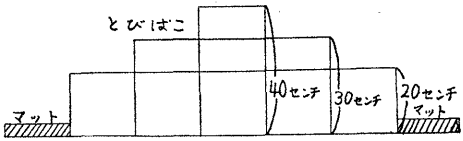
ほんとうにほほえましい情景である。

この時子どもたちの動きに合った静かな曲をひいてやると一層効果があがるだろう。「めだかの学校」などもよい。

〔山のぼり〕

「海でだいぶあそんだから、こんどはみんなで山へのぼってみましょう」

とび箱をつかって左図のように階段をつくっておき、リズムにあわせながら山のぼりをさせる。とび箱の両側へマットをしいておき、活発な動きがあってもとび箱が動かないよう安全な措置をとると共にマットもうまく利用させる。



「さあ二人手をつないで仲よくのぼりましょう」といって、〝仲よし小道〟のレコードをかけてやる。教師が歌ってやってもピアノ伴奏でもよい。

「ゆるやかなところへきたから、かけ足でのぼってみましょう」汽車の曲をひいてやる。この時うしろから友だちを押さないように適当な間隔をあけるよう指導が必要である。

「急な坂道へきましたよ。はってのぼりましょう」タンブリンで拍子をとってやり全身で動いてみる。この時〝のそのそくまさん〟の歌をうたいながらタンブリンで拍子をとってやると、すっかりくまさんになりきって、のっそりのっそりと動いている。

子どもたちはあそびの中で自然に動きのアクセントや拍子感を体得することと思う。

「こんどは山の上であそびましょう」

両脚でピョンピョンとんで頂上までいったら、その上からとびおりる。子どもは高いところからとびおりることが好きなので、大よろこびでやるが、この時脚の屈伸の指導を行なうようにする。

「蛙さんになってかるくとんでみましょう」

「とび下りた時、蛙さんのようにかるく手をついてみましょう」など話し、教師がとんでみせることも必要である。

まとめ

夏季の暑さの中にも、子どもたちの経験をとおしての表現活動は楽しみでいっぱいである。「すっかりあそんで疲れたから、お家へ帰ってお風呂へ入りましょう」といって、チョークで大きな円を床面にかく。子どもたちは大よろこびで、お風呂の中へ入っ

て汗を流す。

この時みんないっしょに手をつないで、教師が即興的に〝お風呂へ入りましょう〟と歌ってやると、子どもたちも口々にまねながら歌っている。平素だまって引っ込み勝ちの子どもも、にこにこ顔ではしゃいでいる。

お風呂で〝耳の後を洗いましょう。手足もきれいに洗いましょう〟と教師自ら洗ってみせると、子どもたちもいっしょうけんめいみながら洗っている。こうした細かい配慮も必要であろう。

子どもたちの身近な経験をとり入れてやると、そのよろこびもひとしおである。教師との肌のふれ合い、親近感もわいて、すっかり満足している。こうしてお風呂の中で休養をとりながらあそびの反省をする。

反省・評価

以上のべてきた私の実践については、健康と音楽リズムの領域にまたがっていて、少し鍛練しすぎた感はあるが、幼児の興味ある教材を取り入れたので、あまり疲労感もなく、一人一人が楽しみながらあそぶことができた。

今日の複雑な社会情勢の中にあっては、外から加わる力が強ければ強いほど子どもの〝耐容力〟を強くしなければならない。この外からの力をうけとめる子どもの内部の力を強めるよう、幼児期において鍛練をし、子どもたちの自分からする範囲をひろげていかなければならない。

しかし何といっても幼児一人一人をみつめ、発達段階に応じて指導を行なわなければならないことをつけ加えておく。

その他

本園においては、すべての運動能力を伸ばす基礎となり、リズム感を養うため、歩行練習を生活時程にとり入れたり、扁平足調査の結果、幼児には扁平足が意外に多いことがわかり、矯正体操を実施したり、室内外共になるべく素足であそばせるようにしたり、六月から十月まで上ぐつを使用しないようにしている。

また幼児期においての健康の基礎育成は一生に通ずる大切な問題であるが、園生活・家庭生活・社会生活など、こどもの生活も多岐にわたり、園のみでは処理できない問題が多々あります。そこで本園においては保健委員会を結成し、保健問題について種々検討を加え対策を講じている。

例えば、環境の検討（川あそび・園庭の安全など）園舎内の照明度検査・血液型検査・その他。

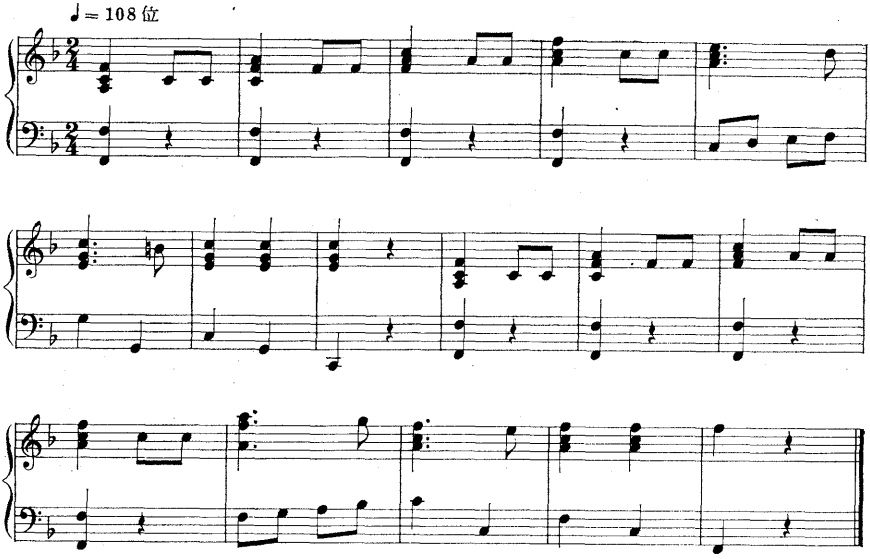
保　健　計　画　表

月	一般行事	園行事	保健計画
4	結核予防デー	・入園式 ・家庭訪問 ・P.T.A.地方委員会	・健康診断 ・歯牙検査 ・歩行訓練
5	憲法記念日 子どもの日 交通安全週間 母の日	・家庭訪問 ・小学校体育会参加 ・遠足 ・ツ反注射. B.C.G.	・避難訓練 ・身体測定 ・衛生検査
6	口腔衛生週間	・園外保育 ・レントゲン間撮 ・保健委員会	・歯みがき訓練　・身体測定 ・梅雨期保健指導　・衛生検査 ・扁平足調査
7	安全週間	・日脳予防注射 ・大掃除	・運動能力テスト　・扁平足矯正体操 ・救急法講習　・身体測定 ・避難訓練　・衛生検査
9	としよりの日 秋分の日	・保健委員会 ・P.T.A.地方委員会 ・小学校親子運動会に参加	・歩行訓練（交通安全） ・運動能力テスト結果処理 ・環境整備　・身体測定　・衛生検査
10	目の愛護デー 寄生虫予防週間 結核予防週間	・遠足 ・親子運動会	・視力検査　・うがい指導 ・身体測定　・衛生検査
11	文化の日 交通安全週間 栄養週間 勤労感謝の日	・園外保育 ・インフルエンザ予防注射 ・学習発表	・歩行訓練　・身体測定 ・検便実施　・衛生検査
12	防火強調週間	・大掃除 ・クリスマス ・ジフテリヤ予防接種	・避難訓練　・冬季保健指導 ・身体測定 ・衛生検査
1	成人の日	・保健委員会	・歩行訓練 ・身体測定 ・衛生検査
2	節分 火災予防運動	・豆まき ・就学前健康診断 ・定期種痘	・避難訓練 ・衛生検査 ・身体測定
3	ひなまつり 春分の日	・お別れ会 ・修了式 ・入園前健康診断	・机、腰掛整備　・衛生検査 ・環境整備 ・身体測定

（島根県　大東幼稚園）

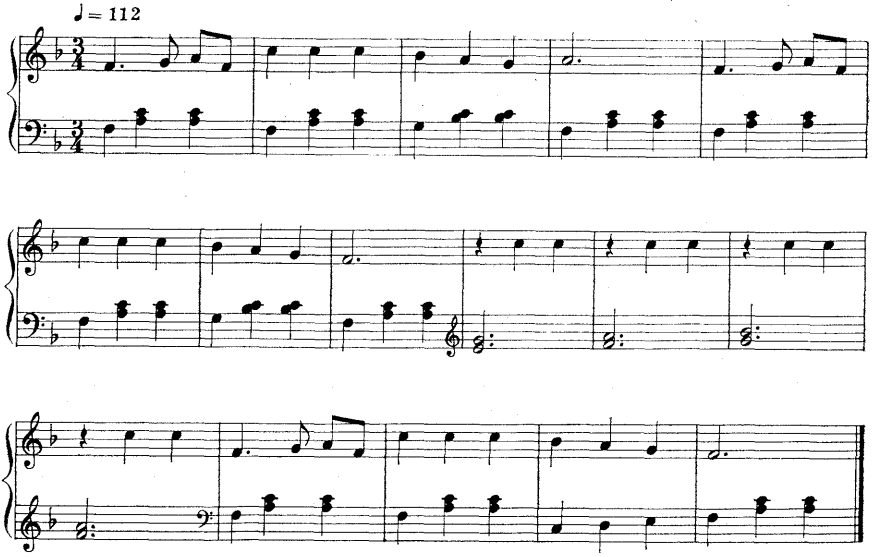
舟　こ　ぎ

♩= 108 位



お　よ　ぎ

♩= 112



日本幼児教育の記念碑

倉橋惣三選集

各巻定価七〇〇円
B6判・特製本

第一巻「幼稚園真諦」「子供讃歌」「フレーベル」・年譜

第二巻「幼稚園雑草」著述目録

第三巻「育ての心」「就学前の教育」補遺・著述目録

第四巻（準備中・十一月発行予定）

第一〜三巻以外の、且て単行本としてまとめられなかった珠玉の論文、随筆を「幼児の教育」などから選び出して第四巻とした。遺墨書翰なども含む。

〔装幀・題字　東山　魁夷〕

○編集委員

坂元彦太郎・及川ふみ・津守　真

発行　フレーベル館

幼児の教育　第六十五巻　第八号

八月号　©　定価八〇円

昭和四十一年七月二十五日　印刷
昭和四十一年八月　一　日　発行

東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

幼児のための紙芝居です

●'66年度幼児テキスト紙芝居全集第5回配本中

たのしい生活シリーズ

花園のスケッチ

¥400　画・木川秀雄

ゆたかな心シリーズ

ころげたやしの実

¥400　画・若山憲

名作12集

オニタのかいもの

¥400　画・石川雅也

東京都渋谷区千駄ケ谷5—17
TEL(341)3400・3227・1458
振替東京29855
株式会社 教育画劇

ホームキンダー

〈9月号〉

●園から家庭へのお願い

9月、園生活に帰って　長い夏休みの生活も終わり、また集団生活にもどっていく子どもたち。家庭では、この子どもたちのどんなところに気をつけたらいいでしょうか。

●子どものからだと心

目をたいせつに　目の保護は、とかく忘れがちですが、目の衛生の基本的なことや、注意事項を、やさしく、わかりやすく解説します。

●自然観察

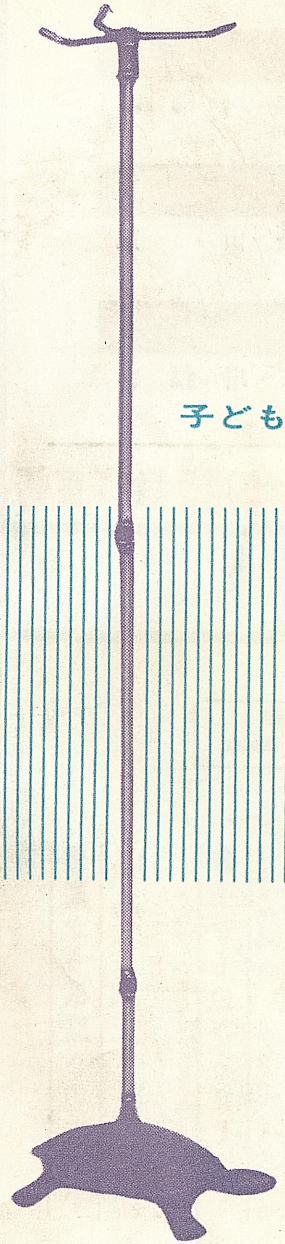
秋に鳴く虫　ハイキングや旅行でいろいろな虫の鳴き声をききますが、秋にはどんな虫がいるのでしょう。美しい絵や写真で、それを観察してみます。

●社会見学

チョコレートのできるまで　子どもたちの大好きなチョコレートは、どのようにしてつくられているのでしょう。近代的な工場を見学してたのしい記事にしてみました。

このほか、家庭における幼児教育のヒントを、やさしく、たのしく、たくさん紹介しています。おかあさまや、おとうさま方に、おすすめください。　L判・多色刷24頁・定価40円

発行　株式会社 フレーベル館



キンダー スプリンクラー

子どもの夏を楽しくする新しい水浴び遊具

●子どもは水遊びを好みますが，水を浴びることは皮膚を丈夫にしたり，血液の循環をよくしたり，内臓神経を正しく働かせたり，子どもの夏の健康法としてはたいへんよいものです。**キンダースプリンクラー**は，子どもの心理をよくつかんだすばらしい遊具です。水を通すと先端のパイプが円形に回転して，広範囲に撒水します。また，継ぎネジの調節で30cmから130 cmまで5段階にかえることができます。**定価 1台 2,800円**

東京都千代田区神田小川町3の1 TEL(292)7781(代) 振替・東京19640 **フレーベル館**

凸版印刷株式会社印刷